

岡本敏行自叙傳



始



岡本敏行自叙傳

特 233
580



本敏行自叙傳



緒言

自叙傳を書くに自己暴露的 (Exhibitionism) 傾向を以てするルーソーのやうなものと、辯護的 (Apologetic) にするものとあらう。正直に何もかも書くことは日記でもあれば爲し得るも、記憶を呼び起して書くときは、詳細に渡りて正確に記し得るか疑問である。ルーソーの如きも幼少の事は能く記憶してゐるも、中年のことは反つて忘れてゐると言うた。今私が自己の經歷を書くことは、日記もなく唯記憶より記載することであるから、精密に爲すことは出来ぬ。唯満六十五歳の今日まで、私が経過した著明なる事實を記録し、後年子孫にして、過去の血縁中邊土より都會に出現せるは、何に因るか知らうとする者のために残すのであ

る。私が外國より歸朝し養育費を父に送りて、二人の妹を教育し、他の一人は家事裁縫等を習はせて、大江乙亥門氏へ嫁せしめ、教育したる二人の内、一人は上野正人氏、一人は川島信太郎氏の妻となし、各數人の子女を生み、私の子供と合算すれば、其數は中々多い、之等の中には醫業、法律、工業、文學に志ざし、既に帝國大學を卒業せるもの、又は在學中のものがある。私の祖先岡本、木津、長宗氏等徳川時代以來、山間僻郷に居住して、特に他國に於て頭角を現したものが無い。私が獨立獨行滿十五歳にて、故郷を飛出し海外に學び、歸りて家を起し、妹等を都會に嫁せしめたから、祖先の血統が各地に散在し、各方面に活動するものが出で來たつた。後日其末裔中に、歴史的に研究するものが生じた場合に、些か目標となるやう、私の經歷の要點

二

を記することにした。私が斯く志を立て家を起さうと努めたことは、全く長宗我部氏を祖先中に有すと信じて、獎勵鼓舞した祖母長宗とえ女に負ふのである、他の何者の感化よりも此祖母の薰陶が、私をして今日あらしめたのである。されば此記録を讀む者は祖先の偉大を信じ、艱苦に耐忍し、意志強固なれば必ず方法ありとの信念を以て世に處し、天の攝理を疑はざるやうに希ふ。天、運命、神と名は何れでもよい、宇宙は自然の法則に支配せられ、春あれば冬あり、動は反動を生じて、嚴然犯すこと能はざるものがある。道理は最後の審判者であるが、世には人間の哲理を超脱せるものが多々ある、セキスピアの言の如く

There are more things in heaven and earth than are dreamt of our philosophy. 不慮の天災地變が生じて、人間を中心として考ふれば不可

三

解の事が多い。私の過去を振り返り見れば、自己の最初の計畫通りに、物事が出来て行かない、時を経ると共に、周囲の事情が變化し、其に應じて計畫も變り行動しなければならぬやうに、運命が支配してゐる、人間の企圖の成否は天にありて、何事にも人事を盡して、天命を知るより外に安心はない。There's a divinity that shapes our ends, rough-hew them how we will. 徒に富貴榮達を望むを止めて、其境遇に於て最善を盡すことが、私等の義務と考ふ。尙私は何故に五十一歳にて事業界より隱退したか、其は生地西江州は中江藤樹先生が居住した土地で、江東と違ひて金儲よりは學問を尊び、私は幼時より讀書を好み、長じてゲーテのフアウストに非るも、哲學醫學及神學を嗜り、今法律家たる嗣子の後見をして、諸種の問題に興味を感じ、研究したき志望を持って

ゐるからである。隱退當時の經濟界を觀察すれば、小資本にて事業を起すことは到底成功の見込なく、大資本家の系統に入らうと試みたが、皆失敗に終り、海外視察中には、子供の中に不慮の死起り、嗣子の目的とする辯護士の職業は、多年の失費に堪へざれば、其基礎すら置くこと六ヶ敷、親子共に資金を要する事業に従事することは、結局虻蜂取らずに終る惧あり、兼て希望の讀書と研究に餘生を送り、子供の將來に對して準備を爲すことが、今後私の仕事と信じた。隱退後残れる二女を嫁入させ、男子を英國に留學させた後辯護士として、既に六年間實務に従事せしめた。不幸夫に死別せる女は、醫學を修め開業免狀を得て尙研究を繼續し、將來獨立を爲し得る境遇に置かれてゐる。事業に全然關係せざりしたため、地震に遇ひ貨幣價值の變動

に會して、財産上損害を受けたれども、尙泰然として子女の後援を爲すことが出來た。先年英國內科學の大家オスラー博士は、人間が爲す事業の成否は、概して六十歳になる前に判り、同年齡以後の老人が盡く死亡しても、社會に及す影響は僅少であると説いて、醫界の物議を招いたが、私は除外例あるも、同氏の説に同意する一人である。昔より人生五十と稱するは、少くとも五十歳以前に事業の基礎を作り、晩年は餘裕を以て人生を研究し味ふことが、理想の生涯であると意味したものと考へてゐる。

六

昭和十年七月

東京中野仲町の寓居にて

臨 江 生

目 次

緒 言	
第一章 幼時	二
第二章 他郷流轉	八
第三章 海外留學	一八
第四章 醫術開業	三二
第五章 保險會社設立	四四
第六章 保險會社經營	六一
第七章 銀行及化學工業	七四
第八章 隱退	八二

附錄

一 子供等

二 系譜

岡本氏

木津氏

長宗氏

上野氏

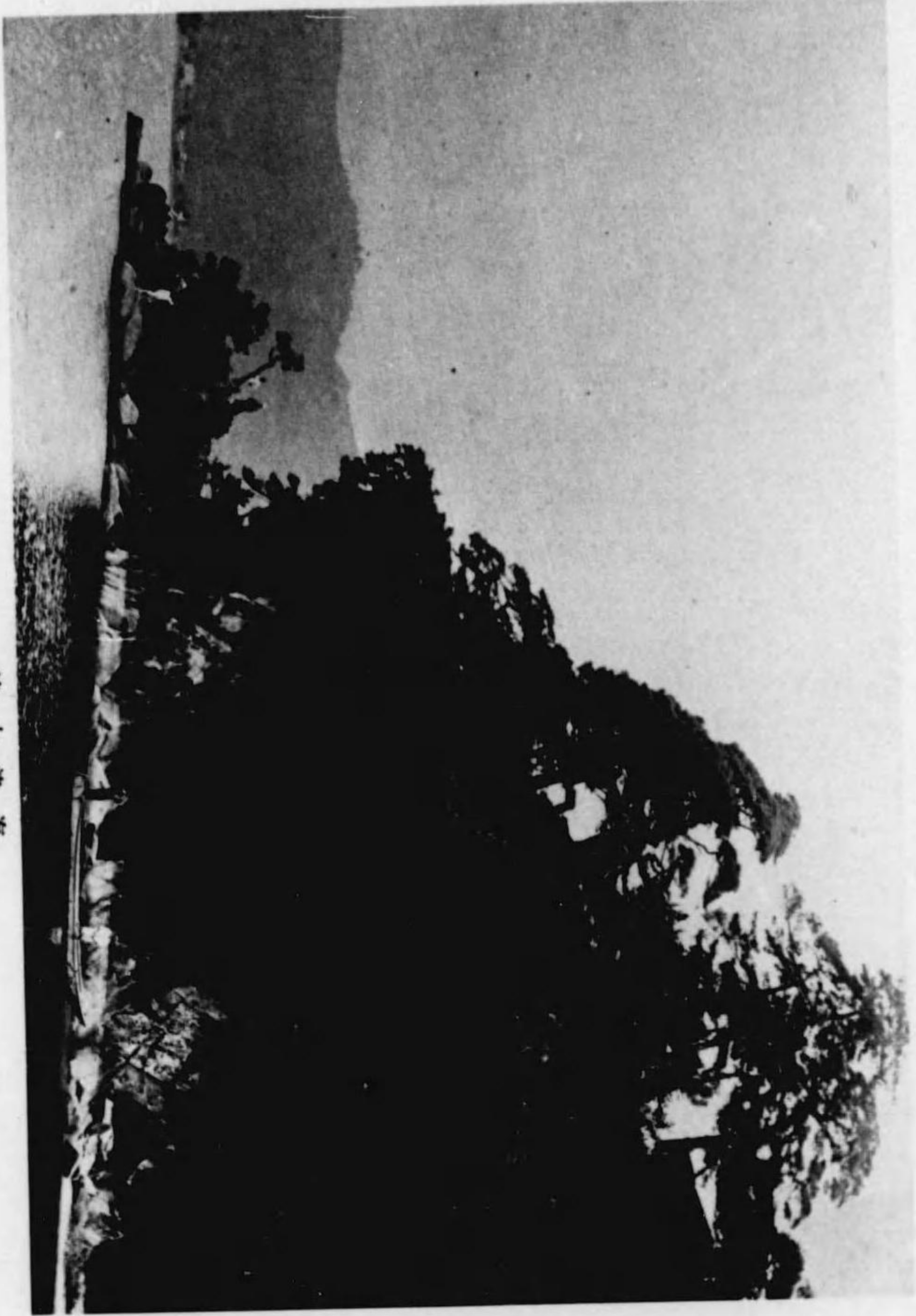
橘氏



(時ノ歳一十七) 母



町溝大縣賀滋



(9) 在=陸ノ岩津海↑

島大津海



明治二十年代（福音會學生）
後列左ヨリ自己、高木近治氏、
前列左ヨリ 黒岩興一氏、高城牛五郎氏、
入江金五郎氏、



石井與三松氏ト令息



氏臣直村田



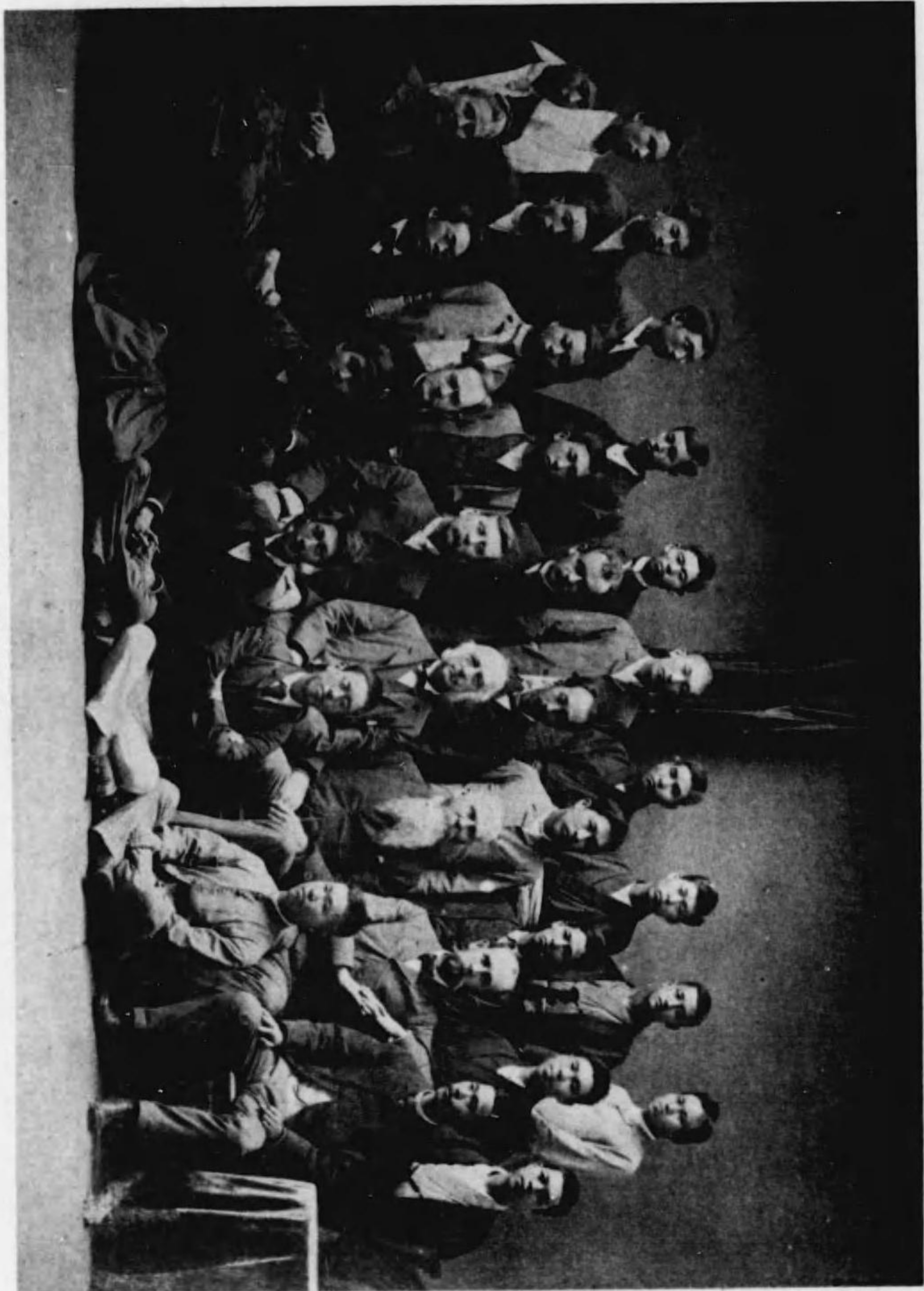
人夫ソーク

氏村藤崎島 ↓

巳自 ↓

氏骨秋川月 ↓

↓ 氏那太道佐比 (列後)



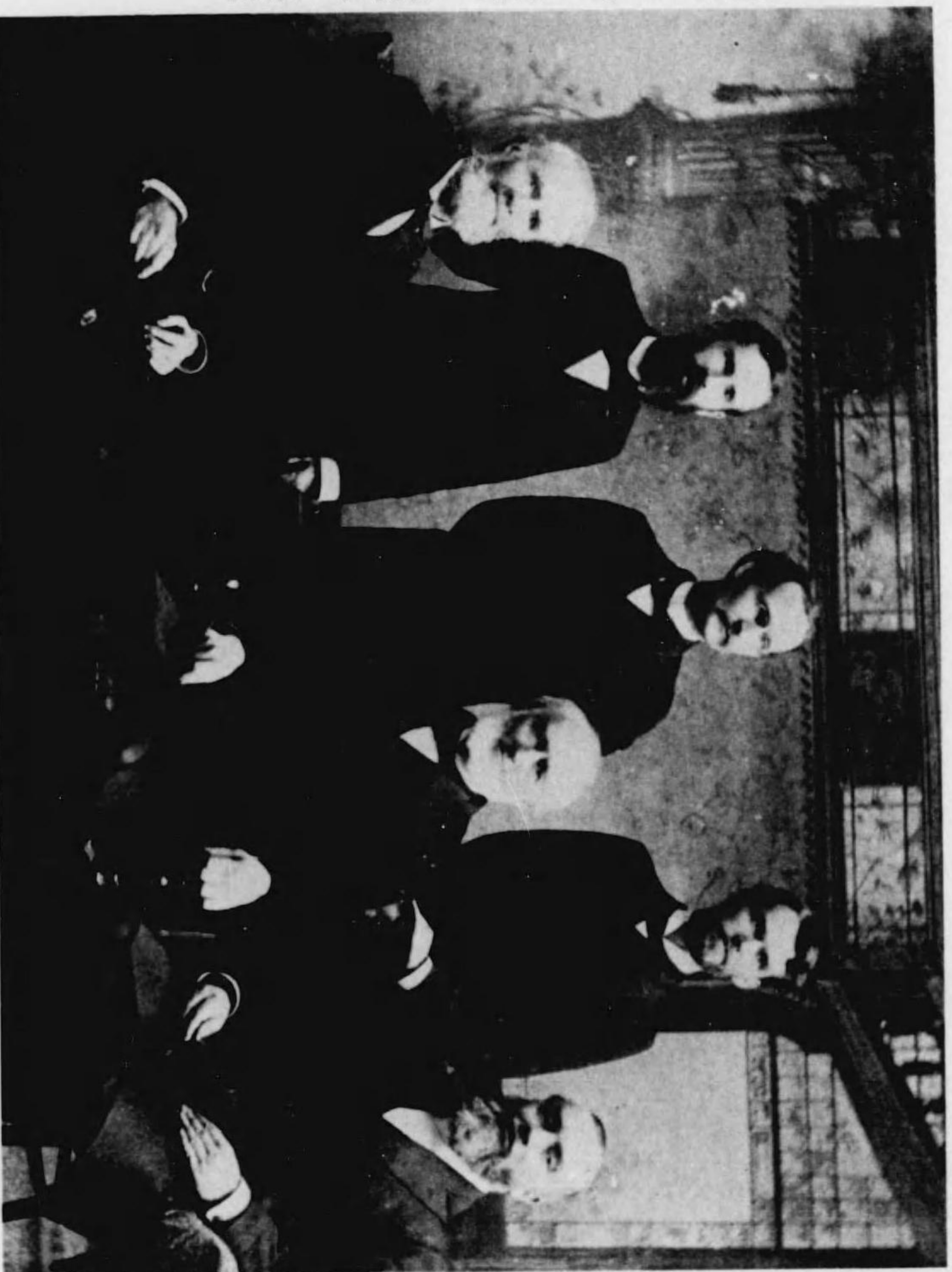
明治學院卒業時 (明治二十四年)

↑ 馬場孤蟻氏 (中列三人目)

(目人二ノ七坐) 氏平和浦松 ↓



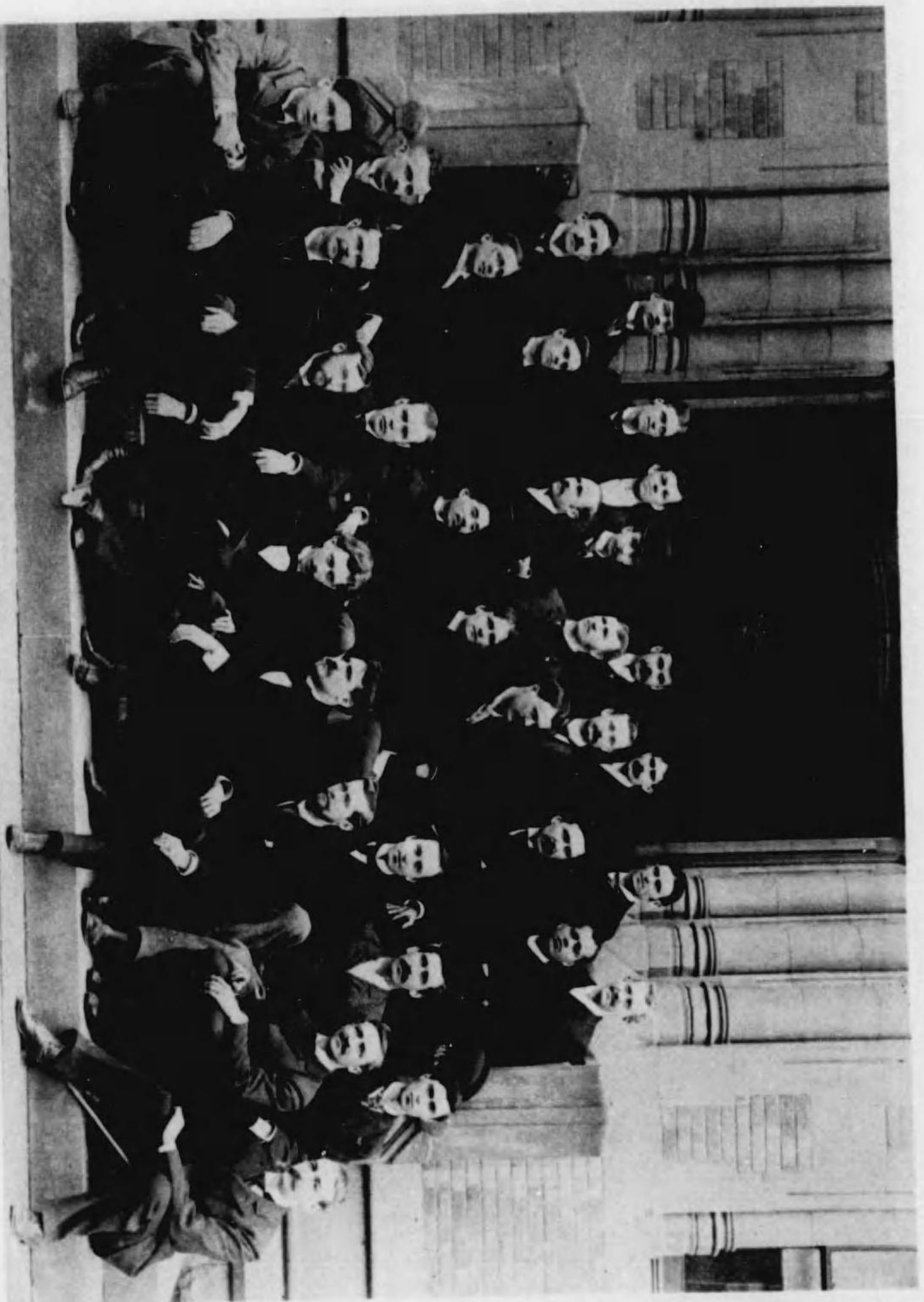
巴自†
代時學在リナミセンーレ國米



前列(右ヨリ)ロバート博士、モリス博士、エバンス博士、

後列(右ヨリ)マクギアライト博士、クレイグ博士、スミス博士、

教授リナミセ、ゾーレ園米



己自↑

代時學在リナミセ、ソオニユ國米

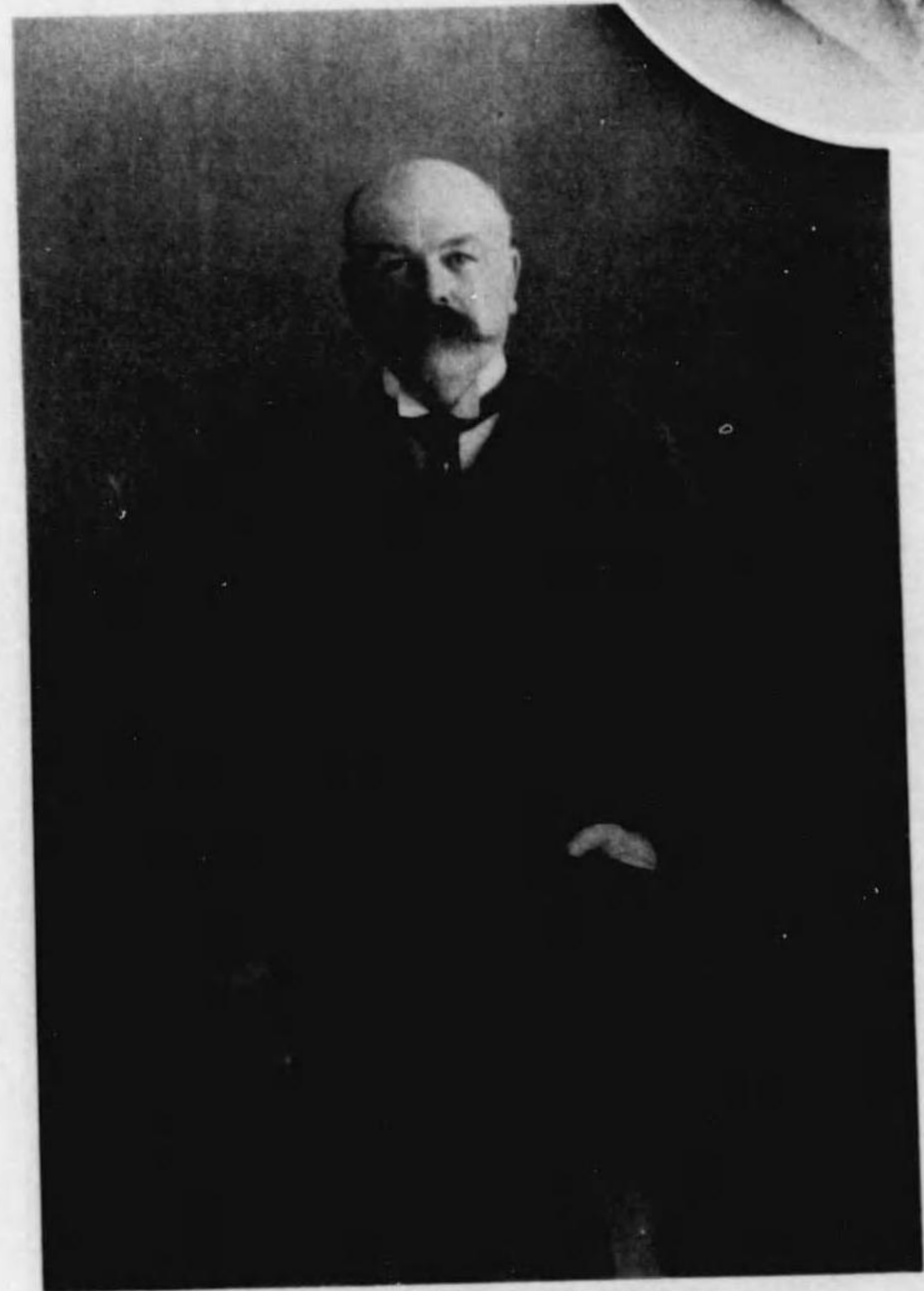


代時學大ナーザレ、ソタヌエウ國米

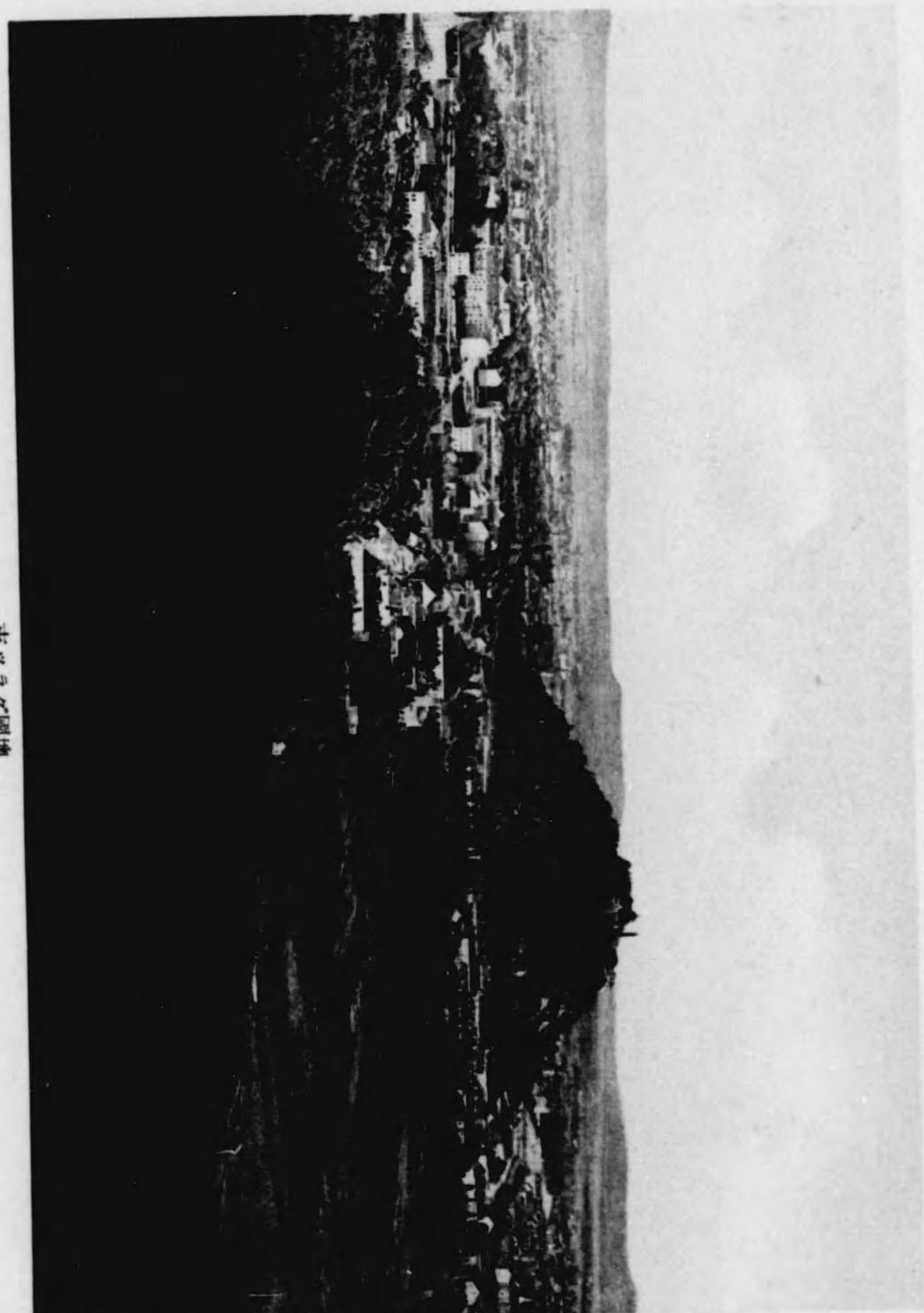
己自↑



オブソン教授



士博ループダンアグ



市カラの園地

市カラの園地



右ヨリ自己敬男、壽英代、一男、とし、さかき、老兄

後列召使三人

前宅町山丸區川石小代年二十四治明



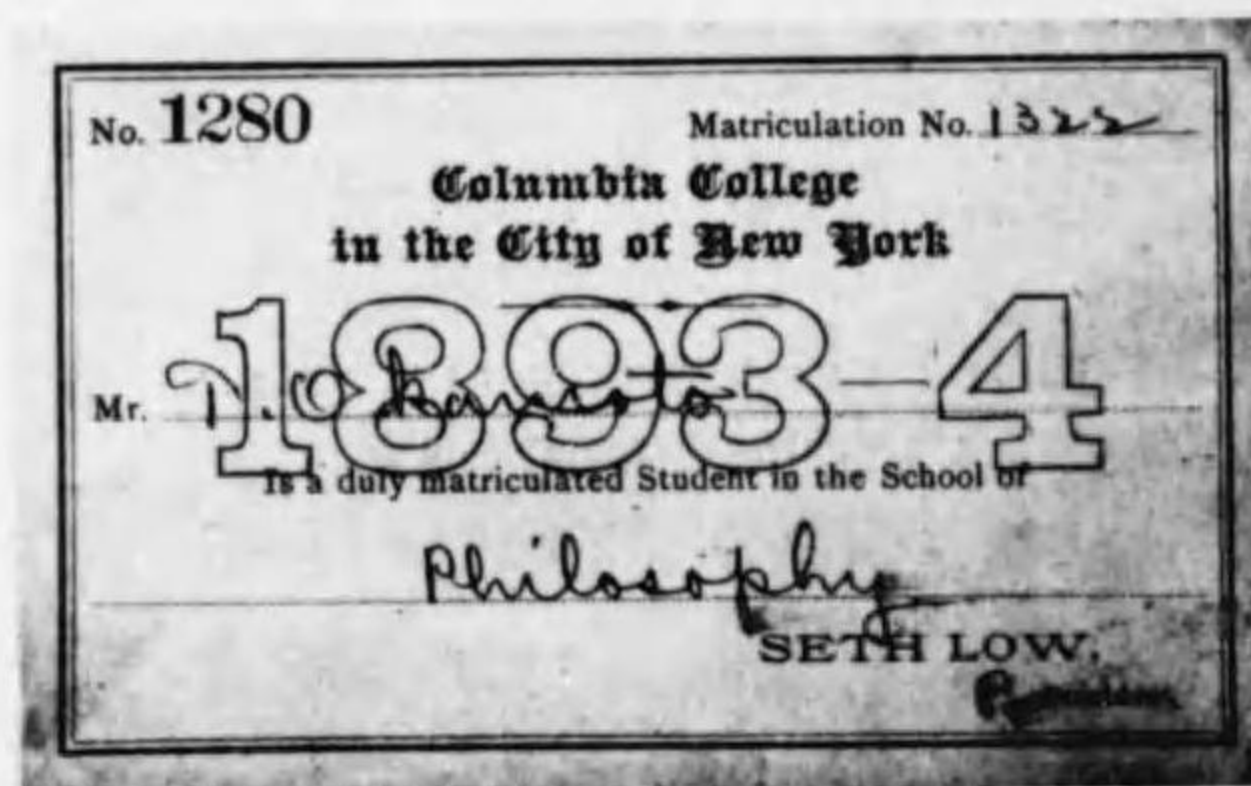
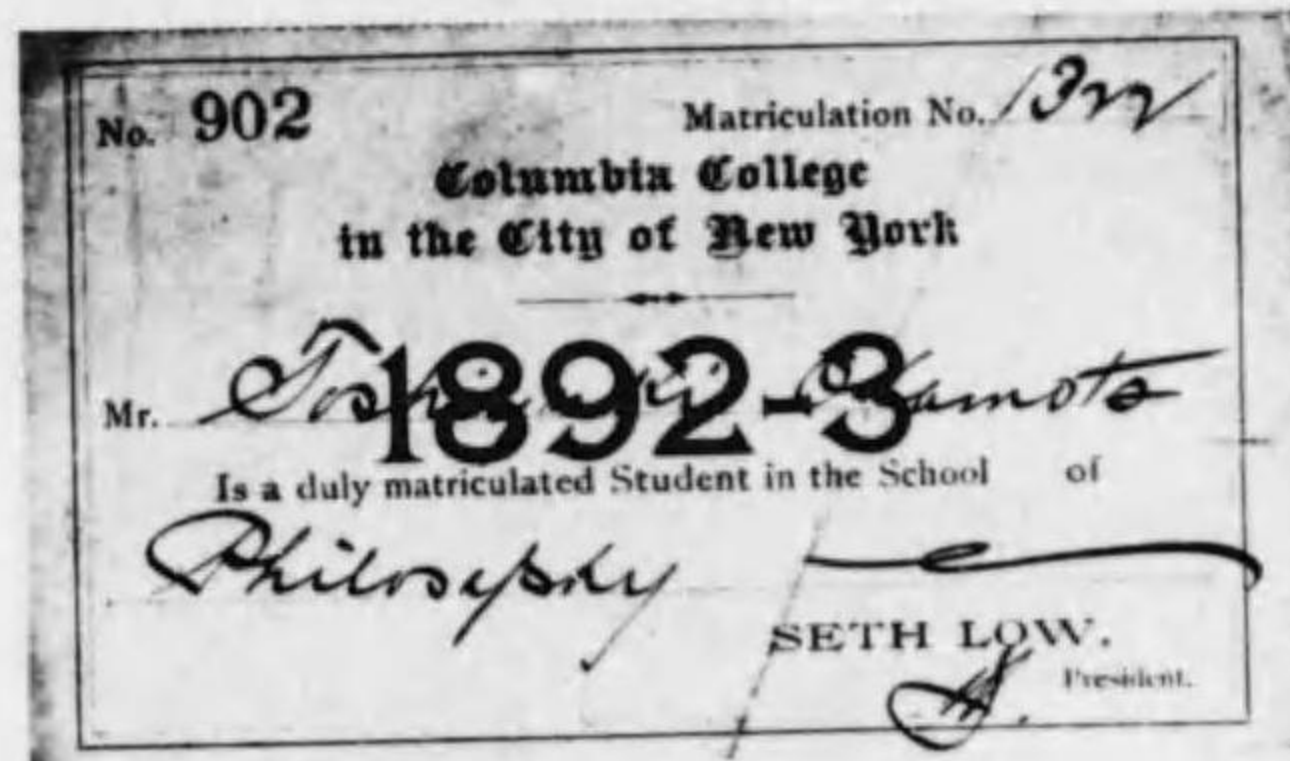
クラム教授

St. Jakobskirche: Kamada mit Louis, Skapula in
Hagen vom 18. Aug 1891 bis Aug 1891. Kamada's
und die mitgebrachten Anwesenlichkeiten in Aug. Abhandlung
desen Zeit ist es nicht wie seine Anwesenlichkeiten mit geistlichen
Gegenständen, sondern von so weit und haben
solche Anwesenlichkeiten Anwesenlichkeiten geistlichen. Es so weit
angenommen geistlichen. Es so weit geistlichen. Es so weit
geistlichen geistlichen. Es so weit geistlichen geistlichen...

Paris, den 18. Aug 1891

Prof. Dr. Fr. Kram

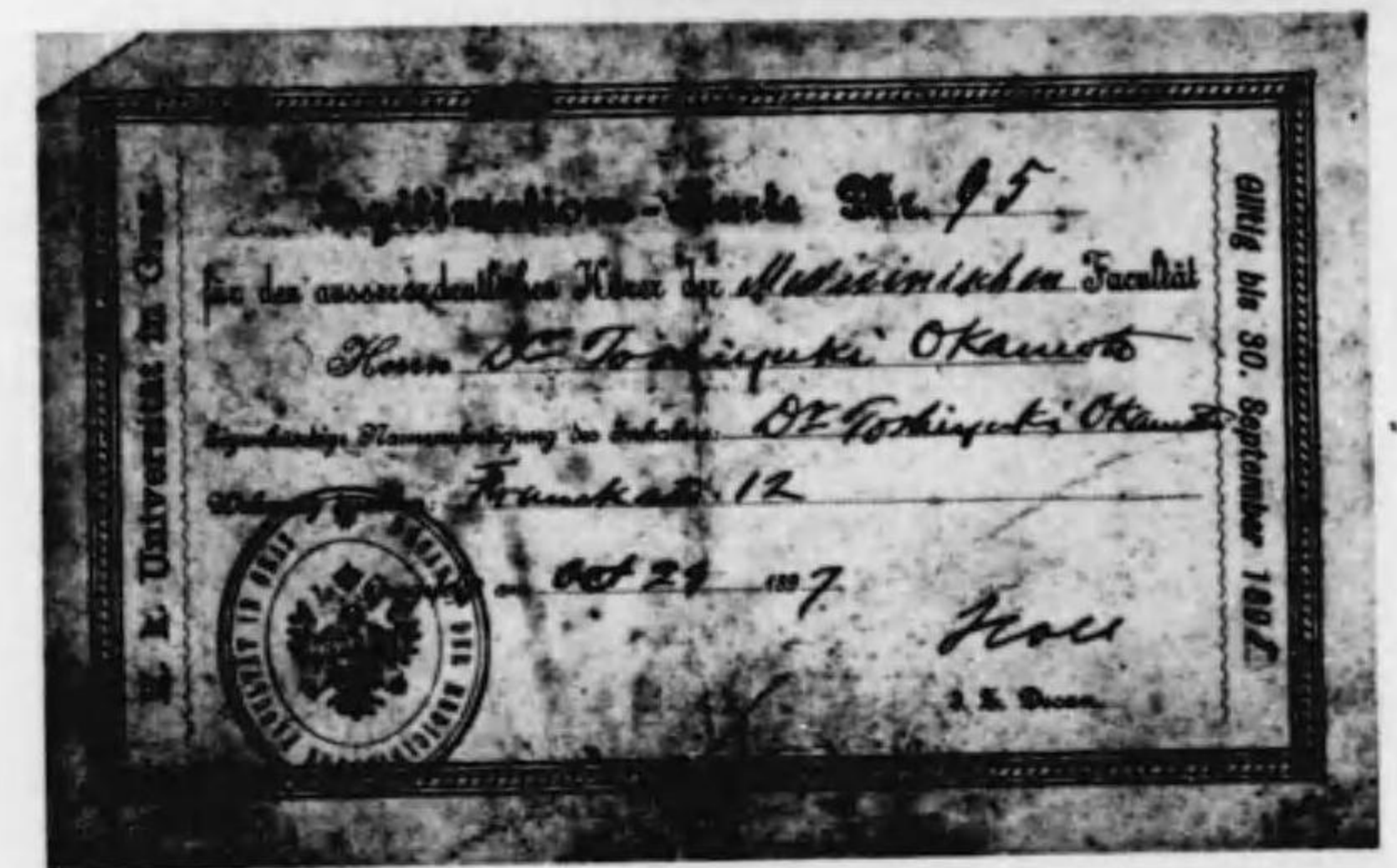
書明証ノ授教スラヲ



← ↑ 學大ヤビンロコ



瑞西ネーシヤテル大學

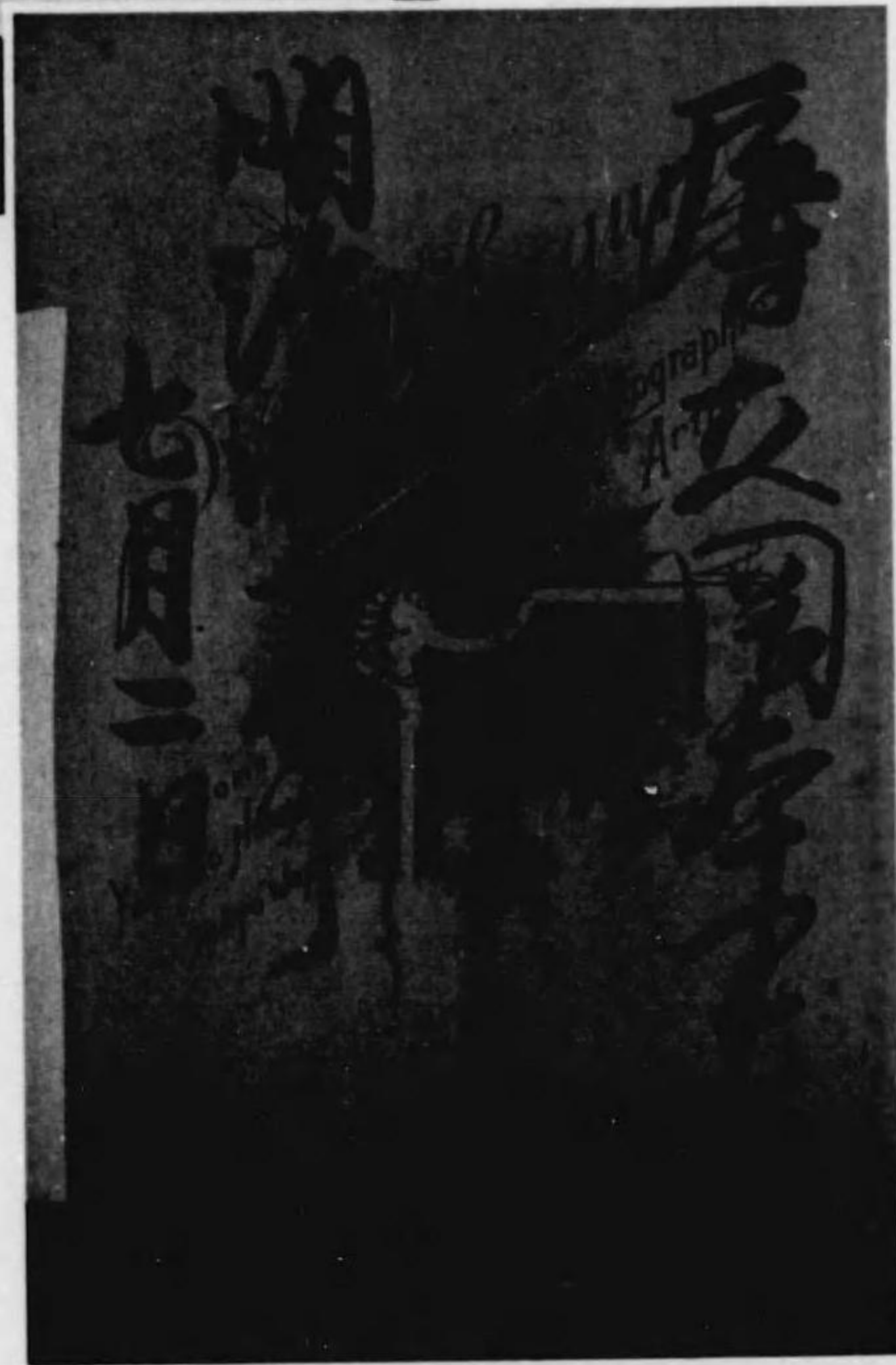


德國グラーツ大學

長録登生學



青山胤通博士



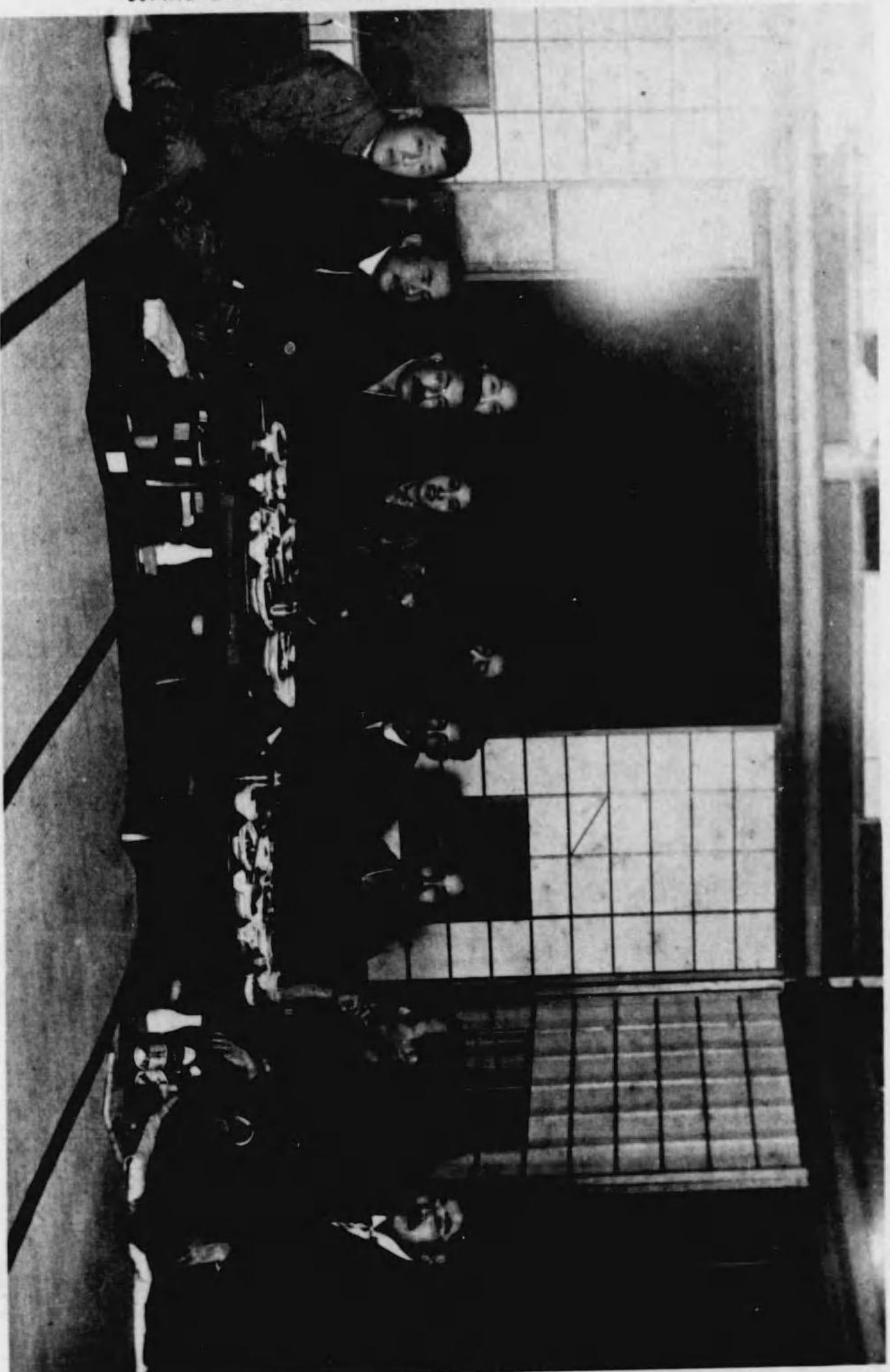
裏ノ真寫

前列(右ヨリ)吉田道夫氏、自己、大倉喜三郎氏、中沢東一郎氏、
榎本竹次郎氏、原田權太郎氏、



後列(右ヨリ)若林信泰氏、薄田長彦氏、高橋理吉氏、笠井守三氏、

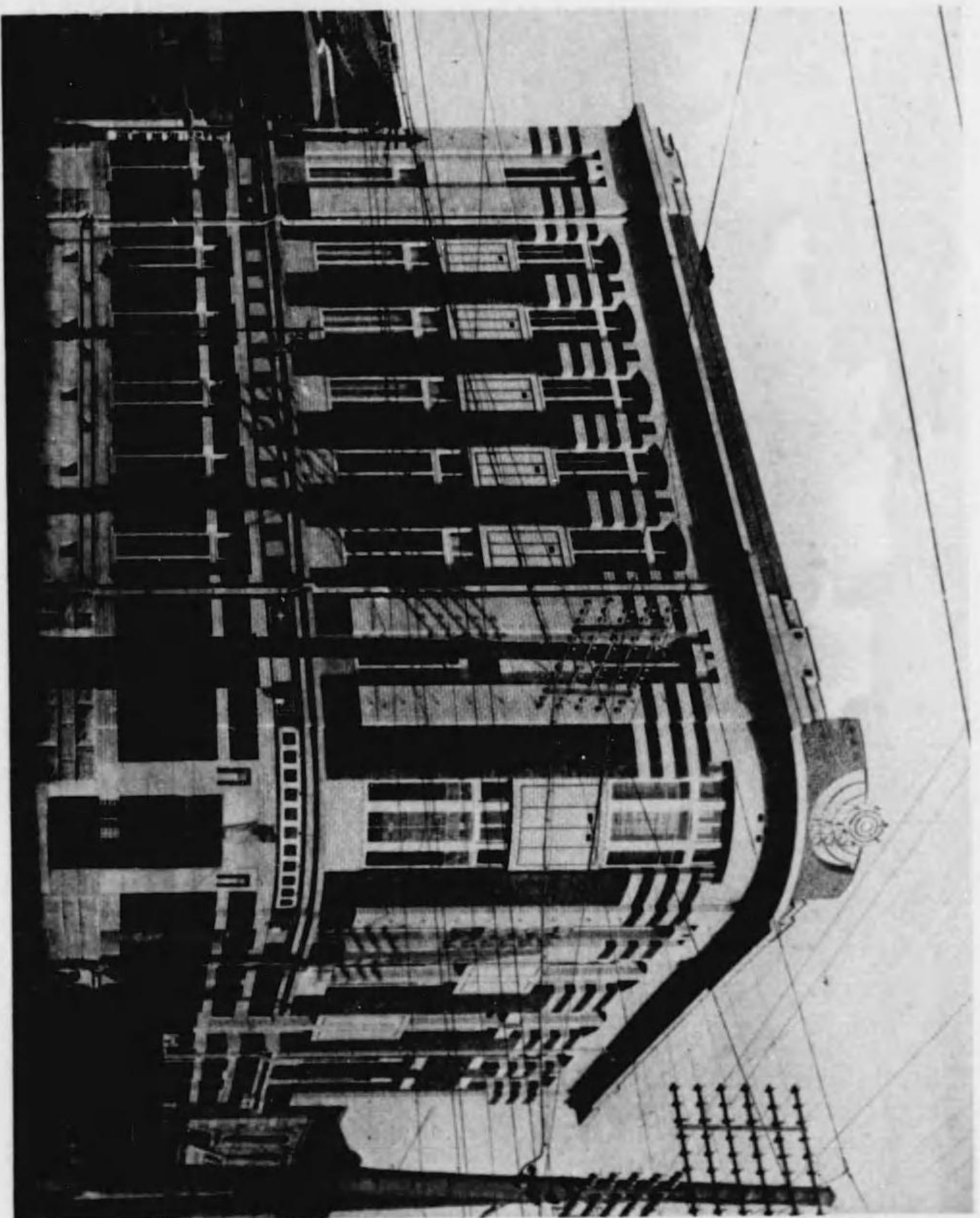
(中社命生出之日) 代年三十四 治明



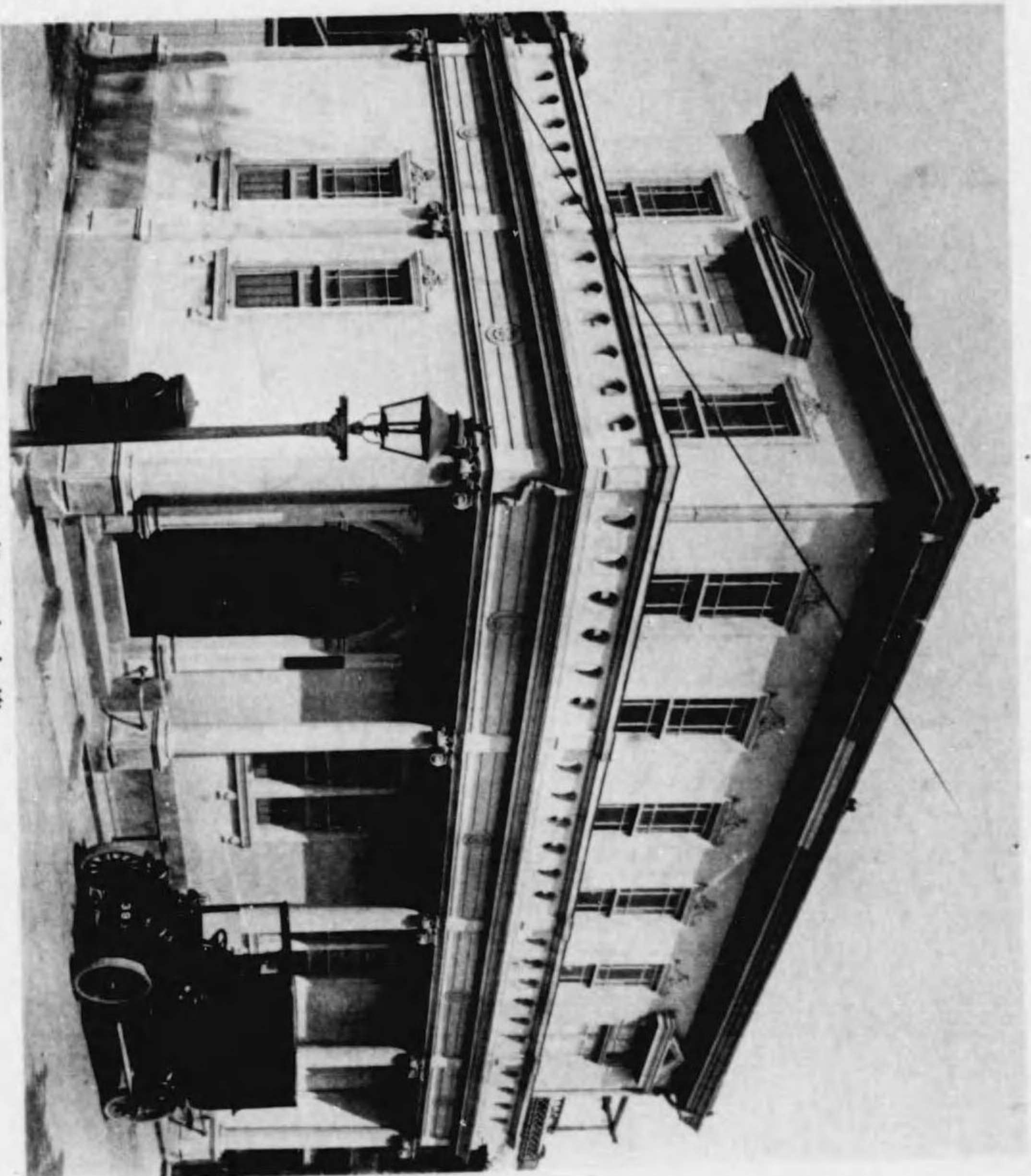
左、三宅克己氏、和田英作氏、島崎藤村氏、馬場孤蝶氏、
戸川秋骨氏、中島久彌吉男、自己〔主人側〕

(代年五十四治明)

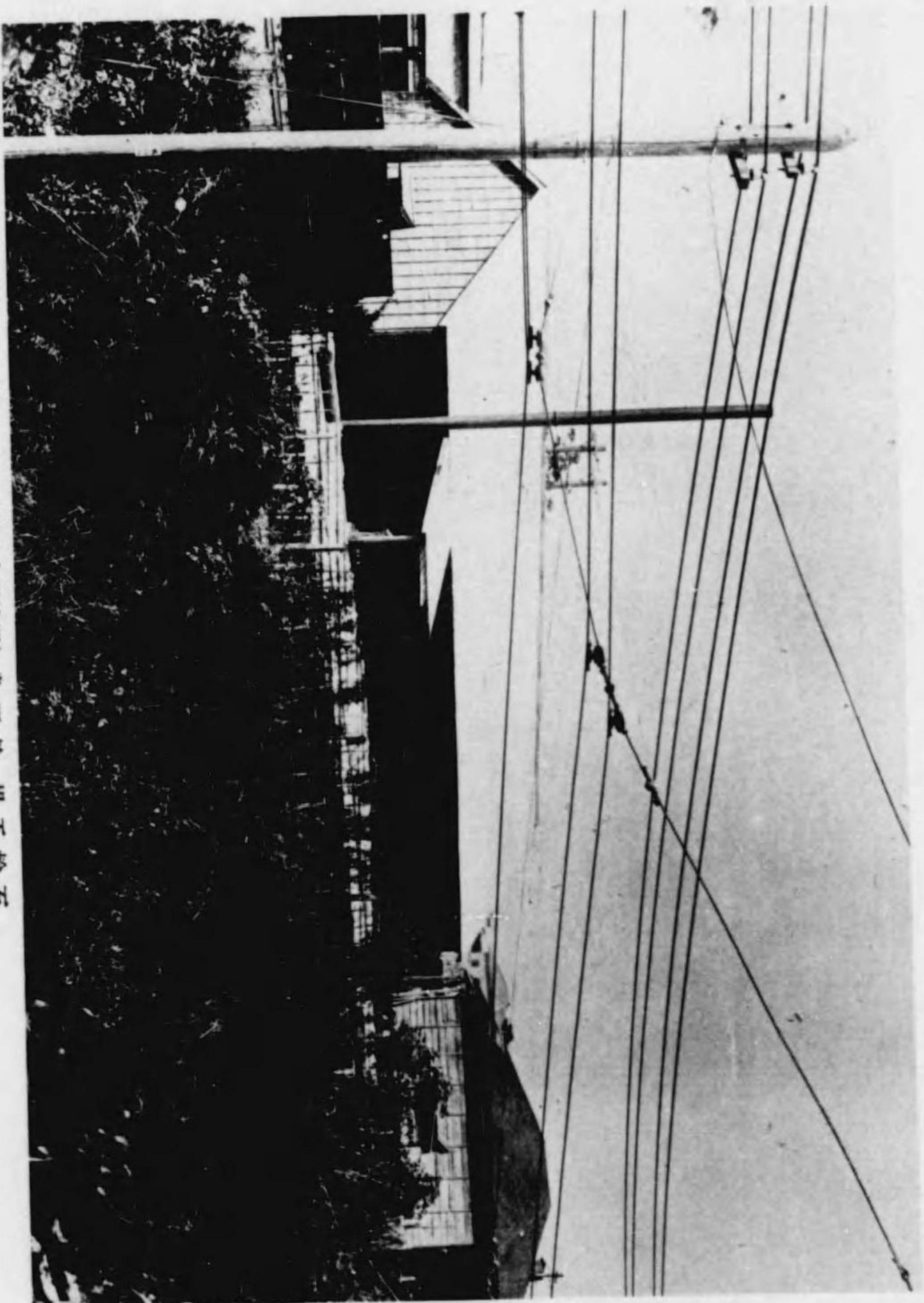
ク招ヲ家面人女ノ窓同院學治明



日出生命保險株式會社



行銀二十九第



石輪工場(明治四十五年)



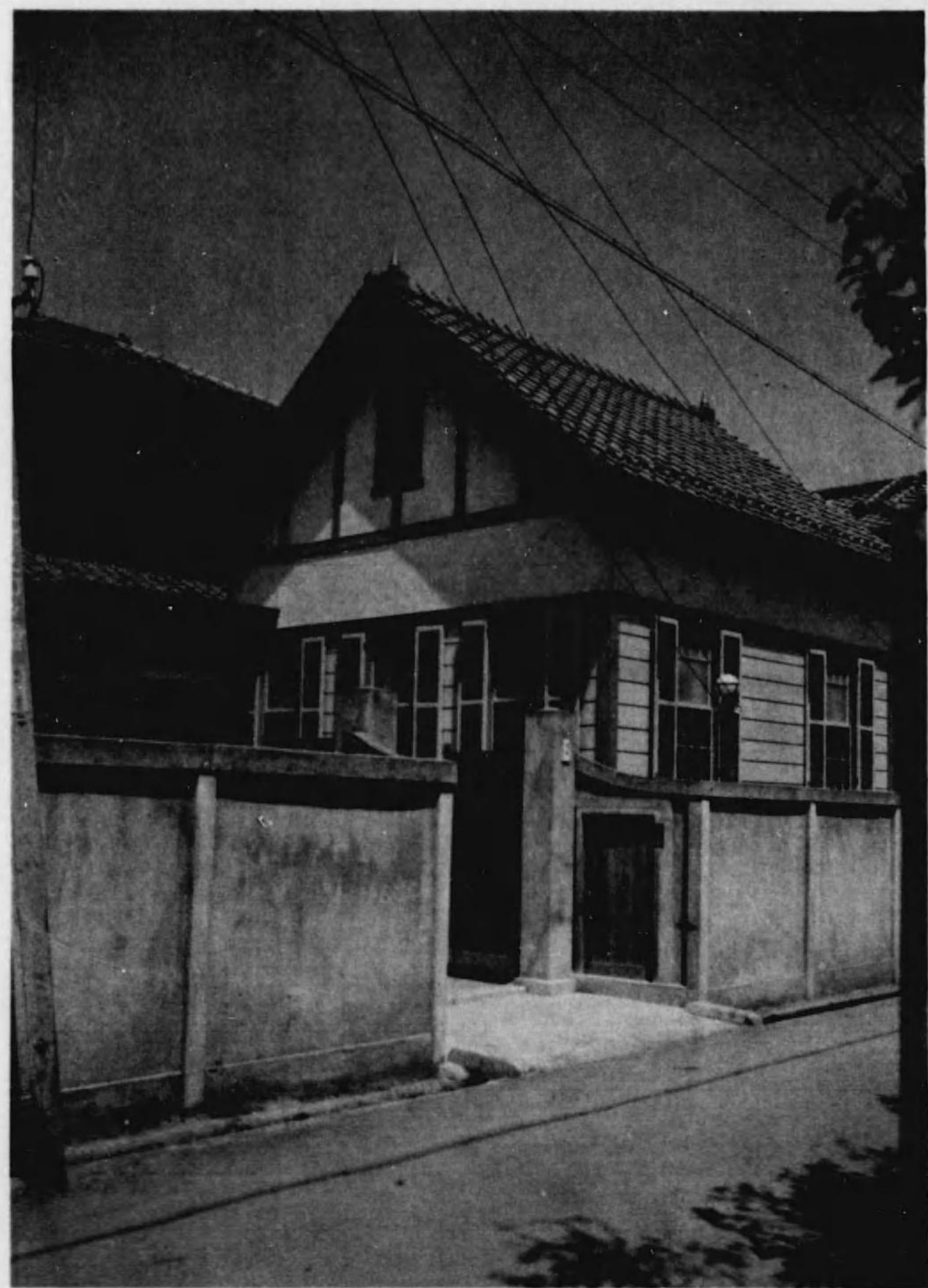
小石川大塚町ノ家(大正九年建築)



前列(右ヨリ)大江克己氏、大江秀雄氏、川島信雄氏、母、川島信一氏、

後列(右ヨリ)藤原代、自己、敏男、さかき、老代、

大正十五年



家ノ町仲區野中



前列(左ヨリ)自己老丈清水新一郎(孫静江同)瑠璃(同)

後列(左ヨリ)敬男美恵さかき 善恵尺

代年九和昭



„Ach, der Sturm! ...
Doch er steht männlich an dem Steuer:
Mit dem Schiffe spielen

Wind und Wellen,
Wind und Wellen nicht mit Seinen Herzen,
Herrschend blickt er auf die grüne Tiefe
und vertrauet, Scheiternd oder landend,
Seinen Göttern“ (Goethe)

“Thus, sometimes, hath the brightest day a cloud;
And after summer ever more succeeds
Barren winter, with his wrathful nipping cold;
So cares and joys abound as seasons fleet.”

(Shakespeare; King Henry VI Part II, Act 2, Scene 4)



第一章 幼時

二

私の生年月日は戸籍上、明治三年五月十五日と記載してあるが、母の話によると、同年九月二十八日が誕生日ださうだ。其頃改暦があつたから誤記せられたものと思はれる。生れた處は滋賀縣高島郡大溝町宇勝野である、其家は今日存在せぬ。父喜六は大溝を去る數里、西北の山谷間に在る高島村字鹿ヶ瀬、岡本仲右衛門の次男で、天保十一年十月十五日生れである。祖先は、橋諸兄卿の後裔と稱してゐる。私は幼時其家に行き、坐敷に古き甲冑が置いてあるを見たことがある。父は生來農を嫌ひ、大溝藩の足輕木津彦右衛門の長女きの（弘化元年七月十日生）即ち私の母の入婿となつたが、後に岡本姓に復歸した。維新の際大溝藩は勤王方にて、京師の宮廷を守護したことがある、其守護兵の中にもた理由で、父は士族となつた。木津氏は宇多源氏佐々木信綱の後裔永田義兼より出で、大溝町字永田に住み、

其支流が木津と稱したものである。私は長男として生れ、幼名は喜太郎、十三歳の頃敏行と改め臨江と號した。之は師別所友恭氏が名けたものである。弟二人あつたが、一人は幼少の時死亡し、一人は幼にして禪宗寺の養子となつた、長じて越前國敦賀郡東浦村五幡洞泉寺の住職となり、五十歳前に死去した。妹は五人尙生存してゐる、其中二人は他家の養女となつた。其一人は養父の死せるため實家に歸り、養母も行方不明となり、私が外國より歸朝後、戸籍を裁判により取戻した。他の三人の内二人は、私が故郷を去つた後に生れ、外國より歸りてから初めて出遇ふた、小學の初級にゐる程の幼年者であつたから、資金を出して教育を受けしむることが出來た。私は幼少の時、相當可愛顔をしてゐたと見へて、二三歳の頃、藩侯の西御殿に奉公中の母方の祖母に伴はれて、同所へ行いた時、女中達が互に抱いて、可愛兒だと言はれたとの自慢話を、母から度々聞かされた。祖母本名は長宗とえ（文化十四年丁丑七月二日生、明治三十一年四月二十五日死）

三

と云ひ、安曇村字庄堺、長宗金六郎の次女で、御殿奉公中はさかきと稱し
長曾我部氏の末裔なりと信じてゐた。私の幼少の節、盛親を祖とする系圖
を示したことがある。併し今日之を發見することが出来ぬ。祖母は私の外
國より歸朝せざる前に死去した、其際祖母の愛好せるものを、皆棺中に收
めて埋没したと聞くから、該系圖も其中に入れたものと思ふ。父は祖母と
性格が合はず、其祖先を自慢するを嫌ひ、所有品の處置に就て無頓着であ
つたこと、考へる。祖母は木津彦右衛門に嫁し、年齢三十五歳前に夫に死
別して、藩侯邸の奉公に出たものである。常に私を愛して孫が一番可愛、
お前は長曾我部の子孫であるから、大にエライ人間にならねばならぬと、
口癖のやうに激勵した。祖母は奉公中信用を受けて、姫君達が嫁せる時從
ひて、綾小路大納言家又は福井藩侯邸へ赴いたさうである。殊に綾小路家
に行いた際、同家にて孝明天皇の御使用ありし白木の御箸を頂戴したと言
ひて、其を大切に扱ひ、此御箸を頭に戴けば病氣が癒ると信じて、鄭重に

保存してゐた。父は甚だ癩癩持で私を屢麻繩にて二階の梁に鈎上げ、臀部
を打ち折檻した。母も亦打擲せられ、其忍耐の強きことが村中の評判とな
つた。父は直に腹を立つる位であるから、非常に正直である。曾て大溝を
去る六里北に當る海津にて、今日の巡查のやうな役を勤めた時、近隣の人
が蕎麥を贈つて來たことを、役所より歸宅後聞き、之は賄賂に類すとて持
返らしたことがある。又甚だ几帳面で長時間端坐し、體位を歪めたことが
ない、酒は一滴も飲まぬが、大の喫煙家であつた、小心にして役所を辭し、
石灰商となり石灰山を持つて、一時は相當に盛んにやつてゐたが、後に失
敗して貧乏となり、六十九歳にて明治四十一年九月四日死亡した。前に記
したやうに私の四歳の時、父は海津に移轉したから、七歳の頃同地の小學
校に入り、夜は校長別所氏に就き漢籍の素讀を習ふた。小學二三年生の時
と思ふが、別所氏に烈しく叱かれ、學校より荷物をもつて家に歸つたこ
とがある。父は別所氏に遇ひ其理由を問ふた。氏は答へて、前に坐してゐ

る生徒が其背中を後ろのものに突かれたと訴へたから、直ぐ後にゐる岡本に「お前が突いたのか」と尋ねた、私は突きませぬと否定したから「然しお前は机の上に手を出してゐるでないか」と言へば、「手は常に出してゐます」と口答へした。其で叱つたのであると話された。父は歸宅後私に謝罪に行けと命じたから、別所氏に詫びて再び學校へ行つた。其以來同氏は私を非常に愛せられ、又級中首位を占めてゐたから大に信用せられた。父が失敗して困窮したのは、私の十四歳の頃で、丁稚に行けと申渡され、早速此事情を別所氏に話したれば、是非學問で身を立てよと言ひて、小學校の小使兼助教に採用せられ、一ヶ月二圓を貰ふた。此金は皆父に渡した。其後何程儲けても皆父に取りられた。父は海津にゐても見込なくて大溝に歸り、娘の養父で友人たる大湖汽船會社の支店長にして、旅館を經營する山川村治氏に頼みて、小荷物係となり生活した。當時私は海津を去り、一里西なる澤村小學校の助教となり、月給四圓を貰ふてゐた。暫して父は私に相

談せず、勝手に山川氏に頼み、月給四圓外に同氏の旅館にて、無料食事をなす條件にて、私を同氏の助手兼切符係に採用せしめた。之は私の月給を皆父の手に納めるためであつた。仕方がなく大溝に行き、數月間表に唯々諾々として切符係を勤め、心に郷里出奔の計畫を立てゐた。或日太田某なる知人が大阪に行く旨告げたから、僅かの荷物を同氏に託し、私は大津本店より、新しき簿記等を習ふために、出津せよとの手紙來れりと詐りて、明治十八年の春年齢滿十五歳の時、決然大阪に出で異郷流轉の人となつた。

第二章 他郷流轉

八

大津の汽船會社本店に立寄り、大溝支店の切符係を辭する旨届け、尙其旨同支店へ通報するやう頼みて、大阪へ向ふた。東區淡路町の普通學舎と云ふ私塾に、同郷の萬木榮次郎八田男兒兩氏を訪問し、同塾内に寄寓した。間もなく大阪府の檢定試験を受けて、四等助教に合格し、北區岩井小學校に採用せられ、月給四圓を得た。當時食室料月謝等は二圓にて足りた。塾生達は盛に煙管にて煙草を吸ふた、私も之を試みたが忽に嘔吐を催し、頭痛が烈しかつたから、煙草は非常に嫌ひになつた、酒も飲まぬ、塾生達は送別會だ歓迎會だと稱して、遊里に足を向けたが、年齢と貧乏の爲私を誘ふものがなかつた。三ヶ月程岩井小學校に勤めたが、淀川氾濫して、北區の大部分浸水し、區内經費節減の要望起り、學校も其影響を受けて、職員

を減ずることとなり、私は免職の沙汰を受た中の一人であつた。直に府廳に行き就職口を探したが、大阪市内では皆無であつた。大和國の山奥なれば、助教を求むる小學校があると聞き、助教仲間の山中奈良吉氏と、大阪を離れて大和へ赴いた。私は宇陀郡下田口村の小學校に勤めた。其處で大和へ歸ることを斷念し、旅費が出来次第、東京へ上ることに決めた。數ヶ月後山中氏、下田口の稻田某、其他一人と同行四人、大和を去り、東京に向ひ出發した。時に明治十九年三月であつた。其頃汽車はなし、徒歩で旅行したが、四日市に着いた時、足痛甚しきため、同地にて汽船に乗り横濱に着した。同港と東京にのみ存在した汽車に乗りて、目的地に達し、神田三河町の木賃宿に泊つた。懐中には僅に十六七錢を餘すのみで、已を得ず三日程焼芋にて空腹を満した。桂庵に行き就職口を求めたが、之と云ふ適當の職なく、人力車を曳くことに決して、同年四月六日に車夫の鑑札を受けた。神田區美土代町二丁目の或家に、山中氏と共に寄寓した、同行者中

九

稻田某は困難に堪へかねて直に歸國し、他の一人は豆腐屋に奉公し、外見上強壯に見へたが、豆を碾きながら心臓麻痺(?)にて死亡した。勞働時代には極く僅少の勞銀を儲けたが、窮すれば通ずる諺の如く、何人か兵隊の残飯が、安價にて買へることを教へて呉れ、一日五錢程で暮すことが出来た。残飯には時々牛肉等も附いてあつた。數月後錦町にある基督教講義所へ出入するやうになつた、之は山中氏が誘ふたからである。同氏は大阪に居る時、既に基督教の説教を聴き、求道者となつてゐた。始め私は基督教に反對して、同氏と常に議論をした、後に講議所の主任者細川瀏氏に就き宗教に關する疑義を匡して同教に傾き、山中氏と共に宣教師ノックス(McKnox)氏より洗禮を受けた。同氏は明治學院神學部教授で、東京帝國大學文科の講師をしてゐられたが、後年米國に歸り、一時は餘り得意の地位にゐられるやうに見へなかつた。私が米國紐育市の學校にゐる時、學校を參觀に來られたが、誰も同氏を歓迎するやうに見へなかつたから、私の食事を

する下宿屋へ案内して、晝食を供したことがある。然るに明治四十三年私が再度の洋行の時、以前私の勉強してゐた紐育市のユニオン、セミナリの教授になつてゐられ、センチユリ、クラブで私に晝餐を饗應せられた。惜哉同氏は我邦へ再遊の際、朝鮮にて罹病し永眠せられた。基督教に私を誘ふた山中氏は、後に京都同志社別科神學校を卒業して、北海道方面の傳道に従事せられた。細川氏は私の窮迫に同情して、數ヶ月間毎月室料五十錢を補助せられた。洗禮後築地に在る聖書會社の宗教書類を行商して生活した。其頃銀座竹川町に在つた福音會の二階に止宿し、同夜學校にて英語を學んだ。同宿中に大學豫備門へ通學する石川八十井氏がゐられた。同氏は東京帝國大學政治科卒業後三井銀行に入り、後に三井同族會の常務理事となり、大に成功せられた。私の心理には、幼時祖母の熱心なる眞宗信仰の感化によりて、宗教歸依の根底があつたから、基督教を信ずるに至つて、青年時代の熱し易き性質に、加ふるに神經過敏のため、明治二十年リバイ

バル即ち宗教勃興騒ぎが、メソヂスト派に起るや、福音會の有志と路傍演説を各所で行ふた。之は大鼓等を叩かぬ今日の救世軍式のものであつた。當時數寄屋橋教會牧師田村直臣氏は、米國よりの新歸朝者で、リバイバル騒に同情し、盛に青年學生間に傳道して、成功を收めてゐられた。私は同教會に轉入し、其會員大倉喜三郎三橋四郎氏等と交際するやうになつた。暫くして教會の長老手島某氏は、私に會堂掃除番となり、同會堂に寄寓すれば、獨身にて會堂に住める田村氏と食事を共にすることが出来て、自活に都合よからうと勧められ、會堂の二疊敷の室へ引移つた。田村氏の推薦にてミス、ミリケン嬢とて女子學院の教師に、日本語を教へ、月數圓を得て、芝白金の明治學院普通學部へ通學した。教師は多く米國人で、英語を學ぶには其頃最良の學校であつた。後日文學に於て有名なる島崎藤村、馬場孤蝶、戸川秋骨の諸氏及び工學博士となれる松浦和平氏が同級生であつた。又卒業せられなかつたが男爵中島久萬吉氏、級を異にして畫家和田英

作、三宅克巳氏等が學院の生徒であつた。島崎君は其頃既に教室にても机下に文學書を繙き、机上には英語の教課書を置いて、文學に熱心であるを見受けた。馬場君は天才的で、餘り勉強せらるゝやうに見へなかつたが、二年生の時級中第二位を占めて、奨學金五十圓を獲られた。三年生時代には、生活の助けになる奨學金を貰ひたいと大に勉強して、私が第二位となり目的を達した。此奨學金は二年と三年に、得點上一位と二位を占むるものに與へられるものである。級中常に第一位を占めた人は比佐道太郎氏で同氏は卒業後、米國ハーバード大學へ留學せられ、卒業歸朝後芳川顯正伯が遞信大臣たる時、其秘書官になられたが、不幸肺患に罹り、三十五歳未滿で死亡せられた。明治三十四年の末肺治療薬に關して、同氏と手紙の交換をしたことがある。故郷に歸臥中書かれた同氏の書翰は、其人物を髣髴せしめ、病魔のため驥足を伸ばす態はざる悶々の情が、躍如として現れてゐるから左に之を録する。

拜啓 遂日寒氣相加はり候處益御健祥奉大賀候過般は面倒なる事御願申上
 候處早速詳細懇篤なる御返書被下御厚志千萬奉謝候直ちに御禮可申上處
 追々遅引病中之踈懶御許容奉禱候夏中は日々海濱となく山坡となく眞黒
 になつて運動いたし大に元氣回復致し候但し此頃は外出之機少なく一室
 に籠り少々書見など致し居候兎も角病氣は中止之姿に御座候か此際直接
 療法なきは残念の極、過日米國にてフロリツクとかいへる紐育の醫伯注
 射新治療法を確立せし由新誌上にて承知せしか如何のものにや例の立消
 に終らすんは幸に御座候」都會之地は追々年末之人氣せはしなき事なら
 んが田舎は至極呑氣にて霜枯時の淋しさ限りなく候籬下の殘菊、檐頭之
 寒雀目に觸るゝもの皆閑寂之想を養ふに足り候我年末の *Stoic view of hu-*
man life は二年間病床の沈思にて更に其意味は深さを加へ候 *Eternal fighting*
 人生唯此の如きのみ進歩も修煉も偏に這裡に在り斯の如くして人は神に
 近づくものと存せられ候

申上度事不盡候得共不取敢右迄餘は期後便候友野氏其他に序を以て宜敷
 御鳳聲祈上候尙療養法に付新らしき事も現はれ候節は何卒御指教奉願候
 早々不一

十二月十一日

道太郎

岡本盟臺

待史

尙歸朝以來いつも折悪しくて未だ一度もランデイス恩師（學院ノ教師）
 に面會せず不本意の極時々思出しては悔み居候他の先生は兎も角ラ氏に
 は自然御面會の折他なき小生の微衷吳々も宜敷御傳願上候
 或夏教師マコーレー氏に伴はれ、輕井澤に避暑した。偶然同地にて英人に
 従ひ、避暑せる吉田榮右氏と親むやうになつた。同氏は後に英國ケンブリ
 ッヂ大學に入學せられた。却説田村牧師は説教には熱心であつたが、雜誌
 を發行し、傳道學校を教へ、インダストリヤル、ホーム自營館を起した。

此自營館は芝白金に土地を借り、學生に苜をやらせ又は牛乳を配達せしめて、明治學院等に通學の傍勞働して、獨立勉學の觀念を抱かしむる目的で起されたものである。勿論學生の勞働のみで費用を償ふことは不可能、其大部分は米國の信徒の喜捨金にて賄はれたものである。斯く宗教事業に盡さるゝにより、教會の方は自然疎かになつて、手島長老其他の有力なる信者と意見の衝突が生じ、教會は分裂して手島氏等脱會し、別に教會を立てることになつた。其處で私は手島氏と親密で、其仲介にて會堂番になつたから、同氏等と行動を共にする決心をした、併し一應田村氏に牧師を辭職し、専心宗教的事業に従事せらるゝやう諫言し、容れられぬ時去らんと思ひ、同氏に右の趣忠告した。氏は私の言に従ふことは出来ぬが、弟の如く思ふ君まで脱會するかと言はれ、其一言に深く感激して、手島氏に其旨を語り教會に止まつた。其後自營館の監督者農林學校生高田某が急に同館を辭したから、田村氏は其跡に私を監督に任じた。同館は明治學院の近所に

在つたから、通學に都合がよかつた。暫く此館にゐたが、前に述べた獎學金を三年生時代に貰ふたから、四年生の時は、三宅克巳氏の親戚に當る人の坐敷を借りて、其家に止宿し自炊して、學院を卒業することが出来た。時に明治二十四年の春であつた。右の獎學金は毎月五圓宛分割して呉れるものであるが、獎學金を得たとの報道が、故郷の父の耳に入るや、上京する村人を私の寓居に立寄せ、是非其金を父の方へ送るやうにと申越された。其人に私の苦學の模様を語り、金は一時に纏めて貰ふものでなく、分割拂であるから、送金する程の餘裕がないと話れば、大に感心して立去られた。父は貧窮の結果、私に對する態度が獎勵的でなかつたから、如何なる困難に遭遇しても、ホーム、シツクが起ることなく、益奮闘の精神が旺盛となつた。

第三章 海外留學

一八

私は幼少の頃、熱心なる佛教信者祖母の感化を受け、今亦基督教の傳道旺盛なる零團氣の中に、教育を受けたから、僅かの月給にて英語教師の就職口を探すことなく、兼て熱望せる海外留學を實現し、大に宗教哲學の蘊奥を極めやうと決心した。然し學院の米人教師は、學資豊富の青年が留學するを妨げなかつたが、苦學して米國大學に入らんとするものには、全然反對の態度を取つてゐた。されば米人教師達に相談しても、渡航の便宜を得るは六ヶ敷、思案の末田村氏に詢つた。同氏はオハイオ州シンシナタ市レーン、セミナリ教授、ロバート (Robert) 氏に書面を出して、同校の給與金 (Scholarship) を貰ふやう依頼せられた。此給與金は米國の大學、又は神學校に設けてあつて、紹介により成績の良好なる貧窮生に支給するもので、

暑中休暇間を除きて、學期中は儉約すれば、生活し得るに足るのである。幸にロバート氏より給與金の許可ありし返書が來たから、渡航費の工面を始めた。船及汽車は三等としても、少くとも百圓程を要し、東京にて之を借ることは困難で、小學生時代の知人、滋賀縣海津の石井田與三松氏に依頼して、其大部分を借ることが出來た。此石井田氏は私の恩人で、大の同情者であつた。旅費の不足は在京友人の饒別にて充し、洋服等は友人の古ものを貰ふて間に合はした。外國人よりは何等の援助をも受けなかつた。私の編著心臟病論の序文中池田謙齋男爵が、宣教師の補助によりて渡米せるやう記載せられたことは、後年私が歐羅巴に行いた時、米國大學教授の援助によることを取違へて誤記せられたのである。石井田氏に借金したことは勿論、米國留學も、全然父に通知せずして出發したから、父は同氏に對して氏か金を貸さなければ、私は洋行出來ず月給取になつて親を助けたものと、怨言を洩したさうだ。明治二十四年七月九日 (滿二十一歳) 最

一九

初のエンプレス、オブ、インヂャ號に乗船し、晚香坡に向ふた。同船には後の子爵野村靖氏佛國駐在公使として赴任のため、後日農學博士となれる本田幸介氏、鴻池銀行専務取締役となれる加藤晴比古氏、醫學博士となれる高安道成氏等留學のため、一二等船室の客であつた。船中にて野村子を中心として、種々の談話に日の暮るゝを忘れた。三等は支那人スチレージで、臭氣甚しく下等の支那食にて、私は随分閉口した。晚香坡よりは單身加奈陀大平洋鐵道に乗り、ウイニベツグ市を経て、合衆國オハイオ州シンシナタ市に到着した。其頃米人の日本人に對する人氣はよろしく、乗客中の一米人は途中乗換驛にて別るゝ時、菓物肉片パン等を籠に入れ、辨當を作りて呉れた。時には日本は支那の一部かと問ふ者もあつた。邦人中米國の男女が手を携へて散歩するを見て、奇異の念を禁じ得なかつた。レイン校の學生中、我國の男女交際の狀態を聞訊した人があつた。此人は或下宿屋で數年前、一人の邦人に就て奇妙な話を聞いた、其は次のやうな事であ

る。或時下宿屋の女主人が此日本人と買物に出かけた、婦人は步調を同ふして街に出でたが、此邦人は直に步調を亂し、或は先きに歩み又は後れてしまひ、どうしても婦人と同列に歩行しなかつたから、同宿人間の評判となつた。此邦人は歸朝後、東京帝國大學の文科の教授になり今は故人となつてゐる。今日銀座を散歩する青年は此話を聞いても、何の感興も起らぬ程我國の風俗も變化したが、昔は米國にて男女交際の自由にして、尙風教上の過失が少かつたには感心したものだ。レイン校は神學を教ふる學校で、寄宿舎に着いた時は夏期休暇の終り頃で、唯一人の卒業生がゐて、私の貧相な顔を見て金を持ちてゐるか無ければ少し貸してやらうと云ふて、若干の金を貸して呉れた。此卒業生はアービン (Irving) と云ふ人である。在學中コーン (Cone) と名のる上級生が甚だ親切で、市中に在る自宅へ屢我を案内し、饗應して呉れた、其母親は特に私を子のやうに待遇せられ、此學校にゐる間少しも淋さを感じなかつた。此婦人は至極溫柔なる性質で、若く

て夫を失ひ二人の男子を養育し、長男は大學卒業後神學を修め、私の友人であつたが、レーン校を卒業して、母の反對する女と結婚したから、母の愛情が前のやうでなくなつた。姑と嫁との關係は、人種の如何を問はず、餘り良いものでないことに氣が付いた。次男は醫師となり同市に開業してゐる。レーン校に来て數月を經過し驚いたことは、同校教授間に新神學派と舊守派との軋轢甚しいことである。其時まで米人の多數は基督教徒で、信者間に信仰箇條を疑ふ者はないと思ふてゐた、然るに教授仲間に信仰上意見の相違があり、私交上にも異常あるやうに聞いて、私の心理に大なる衝動を受けた。當時紐育市ユニオン、セミナリ教授ブリッ格斯博士は、聖書中歴史の記事に誤謬ありと唱へ、宗教界に大なる騒動を惹起した。各地に同氏の説を辯護するものと、之を異端視するものとありて、レーン校にては、私に給與金の斡旋を爲て呉れたロバート教授は舊守派の頭目で、氏の反對側に立ち辯護派に屬する教授エバンス、スミス、マツギフアート諸

氏は、學者で甚だ親切であつて、人望が舊守派の人よりも多くあつた。今まで誤謬などある譯がないと、堅く信仰してゐた聖書が問題となり、新神學を唱ふる人達が學者で、且つ親切であつて見れば、其議論に首肯すべき根據があるに相違ないと考へ、是非紐育市のブリッ格斯教授の講議を、直接に聞きたしとの念盛んとなつて、同市のユニオン、セミナリへ行くことを考慮した。幸にマツギフアート(M'gift)氏は同校の卒業生であるから、氏に頼むが宜からうと思ひ、ユニオン校にて例の給與金を貰ひ得るやう斡旋を求めた。其結果明治二十五年紐育市へ出で、ユニオン校の寄宿舎に入つた。ブリッ格斯教授は遠く離れて其評判を聞けば、大人物のやうであつたが、直接に其講義の席に列して見れば、聲量少く耳障りし、其説人物共に感服する程でもなく失望した。唯ユニオン學生はコロンビヤ大學、紐育大學等に連絡があり、通學の便宜があつた。そこでコロンビヤ大學の哲學科に入り、パットラー教授(現總長)の哲學史、ヒスロップ教授の心理學

を聞いた。又紐育大學總長マツクラツケン博士の哲學の講議の席に列した。ユニオン校の同級中ノツス(Notts)と稱する學生が、眞面目で勉強家で海外傳道を志してゐたから、卒業後日本へ来るやう勧めた。同氏は後にランキヤスタ市の神學校に移り卒業後、日本に來り東北地方の傳道に其生涯を捧げられつゝある。私がユニオン校を卒業する前に、ブリッグス教授は同氏の屬する長老教會總會で、斷然排斥せられ、同氏の教育を受けたるユニオン卒業生は、同教會の牧師又は傳道師となることを禁ぜられた。又其頃東京にて田村氏が著述せる英文「日本之花嫁」と題する書中、非愛國的文字があるとして、日本基督教會(主として長老派)に物議を生じ、同氏は同教會派を脱會するとの報道が來て、私の信仰上動搖を感じ、今までは大に宗教界に活動せんと志してゐたが、米國でも我國でも、宗教家が鬭争するやうでは感心できず、寧ろ他の方面に轉向した方が、將來悔ゆることがなからうと考へ、随分學資を要し、且つ給與金の設けなき醫科に轉學せんと決

心した。幸にレーン校より母校ユニオンの教授に轉任せるマツギフアイト博士は、常に私に同情せられてゐるから、此趣を同博士に詢つた。博士は之に賛成して、出身大學オハイオ州クリーブランド市ウエスタン、レザール大學の醫科で、月謝だけ免除の特典を得るやう交渉せられ、其斡旋の結果都合よく免除の許可を受けたから、今度は食料室料等を稼ぐ方法を考へた。即ち夏期休暇を利用し、我邦の風俗を幻燈を用ゐて講演し木戸錢を儲けることである、休暇前各地の教會青年會婦人會等に手紙を出し、私と會が木戸錢を折半する條件で、會の方では講演の場所を取決め、私は旅費を支辨す、其でよければ、講演日を定めて返事せられたしと書き送つた。此木戸錢半分が會の収入となることが効能あつて、相當の返書が來て、毎夏二百弗乃至三百五十弗を持歸つた。唯暑中炎天に大きな幻燈の函と、和服等を容れたる鞆を持運び、汗の淋漓たるには閉口し、安直なる下宿屋に泊り、南京蟲に刺され睡眠不足となることも迷惑の一であつた。醫學生時代

には寄宿舎は無かつたから、學生數名組合ひて、一軒の家を借り料理の女を雇入れ、一ヶ月室代共に各自十五弗以内にて暮すやう計畫した。又教授達の信用を得るやう随分勉強して、試験の得點を多く取るやう心掛けた、其例を舉ぐれば滿點百に對し、解剖學九十八、組織八十五、細菌學九十四、生理學九十五、病理學九十三等を得た。腦神經科教授オブソン (Upson) 氏は特に庇護せられ、日本語を研究したいとの口實の下に、毎月四五度同氏に邦語を説明して、若干の金を貰ふた。卒業の際是非歐羅巴に學びたいが、講演のみでは、資金を充分に得ることが出来ぬから、他に適當の方法が無きかと、同氏に相談したれば、氏は千弗位ならば貸與してもよいと言はれ、氏より借金し大に儉約して、獨逸國にて勉強しやうと志し、千八百九十七年の春、紐育よりレッド、スター線の汽船に乗り、伯義のアントワープ港に上陸した。内科の教授フーバー博士は曾て獨逸國ヴェイン大學に於て、内科を數年研鑽せられたが、特に同大學助教クラウス (Kraus) 氏の指導を受

けられ、非常に心服してゐられたから、同教授の下に内科を學ぶやうに紹介狀を與へられた。クラウス教授は當時獨逸國グラーツ大學内科教授に赴任せられて、ヴェイン大學には教へてゐられなかつたから、私はグラーツ市へ赴いた。此クラウス教授は後年獨逸國の田舎にある大學より獨逸伯林の大學へ招聘せられ、世界内科學泰斗の一人となられた。グラーツ大學に在學中、獨逸人と他國人と差異ある點を経験したが、其は次のやうな事實である。同大學耳鼻科の講師に、プロイセン人ベルニツク博士と云ふ人があつたが、或日私に耳鼻科に關して、少しく教へてやらうと申されたから、全く好意の話と思ひ、他の二三のドクトル連に話したれば、共に傍聴したいとて、七八回一所に、ベ氏の説明を聞いた。私がグラーツ市を去る際、他の連中と共に謝禮の意味で、銀のコップを贈呈した、然るに其翌日一同へ同氏より手紙が來て、銀コップは有難く受納する、但し月謝は何々グルデン(獨貨)であると言つてあつたには皆吃驚した。中には謝金を拂ふ位なら、彼の如

き者の講義を聞くのでなかつたと悔ゆるものもあり、又彼はプロイセン人だから、押が強いと譏る人もあつた。グラツ市を去るに至つた理由は、當時發熱一ヶ月繼續し、肋膜炎の症状を生じ身體羸瘦した爲である、其時今日まで苦學して、此處で病没しては、實に残念と思ひ、學問を放擲して、専心健康の恢復を計るを得策と考へ、養生のためグラツ市を去り瑞西へ赴き、ネーシャテルの湖邊に下宿した。同所は巴里以外で、正純の佛蘭西語を習ふ最良の町だと評判が高かつた。幸に熱も出でず気分も良くなつたから、同所の大學にて佛語の講義を聴いた。或時米國大學の同窓で伯林大學にゐるドクトル、ポープ氏が、來訪すとの手紙を遣したから、豫定の時間に停車場へ行き待つてゐたが、何程待つてゐても、全然氏の姿が見へぬ、詮方なく下宿屋へ歸ると、夜間に同氏が到着した。其遅延の理由は以下のやうな話である、列車が或驛に停車中、氏は要便を車外で爲して出て來れば、汽笛鳴りて汽車が動き始めたから、米國流に飛乗つた、車掌は飛乗は

規則違反だと言ふて、既に乗つてゐるにも關はず突き落した、まだ徐行中で幸に怪我を爲さずに降りた、其處で驛長に頼みて電報にて、車中にある手荷物をネーシャテル驛へ下すやう依頼し、漸く夜になつて到着し得たとの事であつた。斯く國々により習慣風俗を異にするから、旅行には注意せねばならぬ。尙他の一例を誌るさう、其は瑞西を去つて伯林大學の夏季講習會へ聴講に行つた時の事である。伯林の或下宿へ泊つたが、夜中人の出入が烈しく騒がしきにより、翌朝一週間分の室料を拂ふて立去つた、後日其女主人より一ヶ月分の室料を拂はなければ、告訴するとの書留郵便が來た、其で日本領事館に至り相談したが、館員の曰ふには、米國の習慣は一週間分拂へば差支なきも、獨國では一ヶ月分拂はなければ、告訴される費用をも、別に負擔せねばならぬから、早速示談した方がよいとのことである。其處で下宿屋の女主人に遇ひ、半ヶ月分に負けるやう談判して、私が言ふには半ヶ月分に負ければ、其日からでも借人があれば室を貸して、

二重に金を取ることが出来る、強いて一ヶ月分拂へと云ふならば、私は金を拂ふて其室を閉し錠をかけ、錠を一ヶ月終るまで所持して、何人をも其室に入れることを許さぬ、其では反つて損になるだらうと話した。女主人は息子に相談するとして他の室へ行き、暫して出で来りて言ふには、自分は承知したいが息子が承知せぬと、私は兎も角其息子に遇ひたいと云へば、一人の青年を連れて来たから、其顔を見ると女主人に似てゐない、直に私の名刺を出し其青年の名刺を請求した、其名刺を見ると法學生某とあつて、其家の主人の名と違がう、其處で私が言ふには母は示談を承知するも、息子たる君が承知せぬとのこと、其理由を聞きたいと申せば、彼は怒りを現し、自分は此女の息子ではない、其は怪しからんことを申したものだ、女主人に向ひ文句を言ふたから、結局半ヶ月分拂ふことで解決した。尙私は歐洲にて長く勉強したかつたが、前に記せる如く體重減じ學費も少くなつたから、一應日本に歸り、澱粉多き米食を取り健康を恢復して後、再び

機會あらば來遊せんと決心し、英國ロンドンに行き、サウサントン港より出帆する汽船に乗る積でゐたが、米西戦争のため豫定の船が賣られ、航路を變更せるため、巴里を経て、佛國シエアブル港より紐育へ行く船に乗つた。汽車にて米大陸を横ぎり、桑港より乗船し横濱へ歸着した、時は明治三十一年の夏年齢は滿二十八歳であつた。

第四章 醫術開業

三二

外國で醫學を研究した私は、我邦醫師の開業の仕方に就て、少しも知識がないから、先づ外人間に開業を爲す方が得策ならんと考へ、開業免狀下附あるや、直に横濱外人居留地に、一ヶ月家賃四十圓の洋館を借り、ボーイとして鈴木と云う男を雇入れ、醫師の看板を掲げた。歸朝の際囊中僅に百五十圓餘残つてゐるだけで、患者が來らなければ甚だ困る譯である、然し私は考を決めれば直に實行に取掛り、其經路に於て差支へが起れば、他の方向に轉歸するに澁滞せぬ性格で、聊か向見ずの傾があれど、實行中熱心に活路を研究するため、常に逃道が発見し得られたから、此度も大膽に看板を掲げたのである。然るに二ヶ月間に性病に罹れる外人醜業婦一人、診療を受けに來たのみで、聞けば我邦にゐる外人は邦人を輕侮し、其妾た

る邦人をして治療を受けしむるも、彼等自は外人の開業醫にのみ診察を求むるとの話で、私の開業も見込がないと断定し、如何に爲すべきかと思案してゐると、ドクトルホイットニー氏が言はるゝには、山手ゼネラル、ホスピタル即ち外人専門の病院にて醫員を要するが、月給は僅か五十圓、然し勤務する積りならば紹介してもよいと、早速同氏の仲介で其病院の醫員となり、高き家賃の家を去り姿見町にて、一ヶ月十二圓の家賃の家を借り、晝食の休みの二時間を利用して、邦人間に診察を始めた。其頃或知人來訪し、之はドクトルの看板を掲げるには、餘り粗末な家だと申したから、金を貸し賜へ、金さへあれば立派な家にて開業するよと、呵々大笑したことがある。此開業は成功で、數月後専心自宅診療に従事しても、生活の見込が立つたから、病院を辭することにした。開業後故郷の父に月々生活費を送金し、又田舎にゐる妹等と呼寄せて、裁縫家事等を習はせようと考へた。一番年上の妹は既に他家に養女となり、夫ありて子供を生み、之は其儘で

三三

よいと決め、其次の妹は横濱へ来たが、田舎風を矯正するに八釜敷私と言ひ過るとて、辛抱せずして歸郷した。残る三人の妹を世話するには、世故に通ぜる婦人を妻に迎へるに如くはなしと思ひ、明治三十一年の秋上野老此嬢と結婚した。妻は丹波國園部の士族上野佐壽氏の二女で、京都同志社看護婦學校の卒業生である、上野氏は藤原魚名公の後裔である。十八歳に成る三人目の妹を同居せしめて家事の手傳を爲さしめ、傍ら裁縫を習はせ残り二人の妹は田舎の小學卒業後京都同志社女學校に入學させ、一人は後に東京津田英學塾を卒業せしめた。妻は最初藥局を手傳ふたが、翌年長男が生れてから、年々子女を産むため其は出来なくなつたが、妹等を育てる上には多大の貢献を爲した。妻見町にゐる時、突然野村子爵より書面が到着し、本田幸介氏から私の歸朝を聞いた、一夕星ヶ岡茶寮にて會談したしとの案内状である。其招きに應じ茶寮に至れば、同子は私の苦學成功を祝され、大に斡旋しやうと話されたから、何分宜しく御頼みすると挨拶して

歸宅した。間もなく再び手紙が来て、面會したいとのことである、同子の邸に行くと言ひ、先日兒玉大將に遇ひて君のことを話した、此度支那福州縣が日本の勢力範圍といふことになつたから、其地方に病院を設立し、醫術を以て支那人の感化に従事して貰ひたい、報酬は臺灣總督府の方より出すことに打合せてある、某日某時に兒玉總督に遇ひに行けと、誠に野村子の親切には感激したが、既に開業してゐるのであるから、支那に行くには、少くとも其感化事業を三年間位繼續することを保證せらるゝかと問へば、其は出来ぬとの話である、然らば折角であるが御斷りすると申せば、子爵は君を出世させてやらうと思ふに残念だと言はれた。子爵は吉田松陰の愛弟子で實に清廉、能く學生を奨励せられ、其援助を受けたものが少くない。私は經濟上の後援を受けたことは無いが、常に好意を以て私を遇せられた。或時子爵に政治界に入るの可否を問ふた、子曰く今日の政治家となるものは、朝に伊藤公の机前に叩頭し、夕に山縣公の足下に跪坐する程に豹變し

得るに非れば成功せず、君の如き硬骨漢は政治界に適せずと。爾來實際に代議士又は所謂政治家となることを斷念した。倭見町の開業所は翌年妻の分娩期直前に火災に罹つた、此時横濱の半分は焼失した、最初火元は甚だ遠く、私の住所を襲ふとは思へぬ程、遙に火が見へてゐたが、風の方向が屢變化し、倭見町をも焼いてしまつた、山手の病院より數人荷物搬出の手傳に來て、或る知人の家まで大半持運んで呉れたが、風の向きが變りて其家をも焼き、私は着のみ着のまゝといふ有様になつた。火災の最中夜の十二時頃、戸部方面の山に近き所に行き、借家を見付けて豫約したが、翌日偶然東京に逗留せる義妹が見舞に來り、以前の家より大きな借家に住み居るに驚いた。二ヶ月後に住吉町料理店千歳樓の前に住む知人が他所に引移り、其家が貸家となるを知らせて呉れ、開業には場所が宜いため、其家へ轉居した。幸に診療を乞ふもの増加し、外國商館雇員の健康診斷、郵便局長棟居喜九馬氏、地方裁判所長渡邊暢氏等の聲援、相當の有力なる人士達

が診察を求められたから、生活には差支が無かつた。棟居氏は後に遞信省より海外視察を命ぜられ、其出發に當りて、同氏の不在中子供なき夫人が淋しさを感ぜぬため、私の女兒一人を養女に欲しいと申され、私の妻は其頃年々女兒のみを生むから、妻の故郷にある兩親に、養育を依託したる四歳の登榮と云ふ女兒を、氏の養女に與ふことにした。此女兒は明治四十三年、私の二度目の洋行中十一歳にて死去した。診療を與へた人の中に故衆議院議長島田三郎氏の養父豊寛氏がゐた、同氏の病氣は肺壞疽で、對診に青山胤通博士が來られた、博士は一見舊知の如く私を遇せられ、爾來博士の死去せらるゝまで交際を辱ふした。横濱の開業は生活に差支はなきも、前途發展の見込少く、東京に出て一旗擧げんと思ひ、田村直臣氏に金融の相談を爲した。氏は名義上氏の所有となれる自營館の集鴨の土地を擔保に供すれば、七千圓位までは借金することが出来るから、東京にて病院經營の考へなれば、後援して借金の保證人とならうと約束せられた。明治三十

三年駿河臺鈴木町に相當大きな家を借り、心臟病専門の醫院を開き、大々的廣告をなし、毎朝一番發の汽車にて横濱より新橋驛に着き、腕車にて駿河臺に至り、午前中同所にて診察し、午後は横濱に歸りて診療に従事した。然るに田村氏保證の下に借受けた最初の一千圓が盡くる頃、氏は其以上借金の保證人たるを拒まれ、私も亦數千圓位の資金では東京にて専門醫として、開業を繼續するに充分でないと感じ、駿河臺の醫院を一先づ中止することにした。此借金千圓は後日貸主に返済したが、田村氏は其際言はるゝには、君は全額を返すことが出來ず、結局氏自ら保證人として、半分位香奠と思ひ支拂はねばならぬと考へてゐたと。私は幸に此借金のみならず借りた金は、内外人の區別なく返却することが出來て、此點では心に疚しきことがない。田村氏も亦後年所有地に借家建築のため、明治商業銀行より土地擔保にて、二萬圓借る交渉を私に依頼せられ、同銀行に田村氏を紹介したが、銀行は擔保物があるにも關はず、私が保證人となるに非れば貸

さぬと言ひ、遂に氏の保證人となつた。數年後氏は借金を農工銀行へ肩變りを爲して、私の保證人たる責任を解除せられた。明治三十五年紐育生命保險會社が、我國に於て保險募集を開始し、盛に活動を爲せる時、紐育本社より醫務の總部長ドクトル、ヴァンダプール (Vanderpool) 來朝して、私と會見し數時間保險醫學に就き意見の交換をした結果、氏は横濱の米人開業醫アルデン氏が日本支社の醫長たるに満足せず、私に診査醫の監督になるやう勸説せられ、先づ副醫長として月給五百圓、別に診査報狀の翻譯監査料一通一圓宛を給與する條件にて、入社することを慫慂せられたから承諾した。暫くしてアルデン氏は免ぜられ、私が醫長となつた。日本に於ける同社の本店を、横濱より東京へ移轉することになり、私も芝公園御成門の角に在る元北里博士研究所であつた福澤家の持家を借りて、再び心臟病醫院の看板を掲げ、今回は背水の陣を布き、横濱の開業所を代診得田易氏に譲り、家族を纏めて東京へ引越した。醫院の維持は紐育生命保險會社よ

入社を勧め、邦人側の事務監督に採用せられ、後に常盤生命保険株式會社を發起して、全然保険界の人となられた。事業に盛衰あるは尙人に生死あるが如きもので、盛なる時は意氣揚々として、未來に就き計畫を怠るものである、紐育生命は米國大統領マツキンレー氏選舉の際、共和黨に寄附金を爲したことを告發せられ、其社長は辭職を餘儀なくせられ、保險募集金額の年總高を法律にて制限せられ、各地の業務を縮少せなければならぬやうになり、我國に於ける業務も緊縮し、支配人更迭し、外人支店長等は免職又は呼戻された。私の俸給は減額にはならなかつたが、診査報狀監査料は廢止となり、明治三十九年頃尙一層の縮少傾向を生じ、其時までは醫長を斷る場合には、互に一ヶ年前に豫告すべき契約を取換してゐたが、其年より三ヶ月の豫告期間に短縮したいと、新支配人より申出があり、愈會社前途の暗憚たるを感じ、全然會社を辭して、醫師の本業に立歸るべきか、將又保險事業の經營に一生を送るべきかを考慮することになつた。私は支

配人及び法律顧問マカイバー氏と共に、三人で日本支社の重役會を形成し、營業上の事務をも取扱ひたる經驗があるから、新に生命保險會社を發起設立し、専心保險事業に従事することに決心し、契約に基き斷然一ヶ年後には醫長を辭する旨、支配人に通知した。此年兼て買求めたる小石川區丸山町十四、十五番地の土地五百坪餘の上に、家屋を新築して移轉したが、大正十年には大塚仲町に再び新築して引越し、丸山町の土地は昭和六年に三菱信託會社に託して分讓し、同年三度目の新築家屋たる現在の住所に轉居した。

第五章 保險會社設立

明治三十九年は日露戦争後で、株式熱旺盛、成金續出、新會社が雨後の
 茸の子の如く發起せられ、其中に保險會社も二三あつたが、保險事業は利
 益を擧げて株主に配當し得るには、長時日を要したから、他の會社のやう
 に人氣がなく、株式熱狂前に、保險會社を發起しやうではないかと言はれ
 た實業家も、権利株で儲かる時代に其發起を勧誘すれば、利益を見ること
 の遅い保險は駄目だと答へる位で、例えば私が郷誠之助氏に生命保險會社
 を起すから、其株を持つて呉れと頼んだが、火災保險なら賛成だが、生命
 保險のやうに零細の金を長年集め、利益を見ることの遅いものは嫌ひだと
 言はれ、之が勧誘を斷はる口實としても、當時生命保險に對する實業家の
 心理が判然する。前章に記せる通り一年後に紐育生命の醫長を辭職し、新

會社を設立する決心を爲したから、辭職日の來るまでに會社が出来なければ、
 失職することになる、是非其までに設立せねばならぬ、何人に其計畫
 を相談すればよいかと思案しゐる際、學生時代の知人工學士大倉喜三郎氏
 が同年の秋、其居住地札幌より上京し、芝公園の拙宅へ來訪せられたから、
 之幸ひと會社發起の話を、同氏の叔父大倉喜八郎氏に紹介せらるゝとを依
 頼した。數日を経て喜三郎氏が私に言はるゝには、叔父に相談したが、大
 倉組は専ら工業に關係ある事業に投資するも、金融に關する銀行或は保險
 の如き事業を發起することは好まぬとの話である、然し自分は君の計畫に
 賛成で、少壯の金持連を勧誘し會社を設立してはどうかと言はれ、氏の案
 に従ひ共に大阪に行き、藤田平太郎、鴻池新十郎氏等に遇ひ、東京にては
 澁澤篤二、福島行信氏等を説いた。大阪の連中は井上侯が顧問であるから、
 同侯の承諾を求めよとの話で、毛利五郎男の紹介狀を持つて井上侯に遇ふ
 ため、興津へ行き門前拂を食つたことがある。大倉氏は博識多才で趣味に

富み、大倉組のロンドン其他の支店長を勤めて、種々の事業に悉しく、且つ各方面に交際があり性質善良であるが、惜哉計畫の才に乏しく漠然たる所があり、結局少壯實業家によりて、會社を設立することは不可能と悟り、誰でもよいから相當知名の人を發起人とし、兎も角會社設立認可を農商務省より受け、株主に特色ある顔振を得て、保險募集の便宜を計るが良いと決めた。或人が偶然私に慶應系に千代田生命、早稻田系に日清生命、高商系に萬歳生命（今は日華と合併）あり、何故に帝大系に保險會社がないのかと問はれ、之に暗示を得て株主には主として學者を集め、學士博士の會社のやうに見せるが良策と考へ、先づ青山胤通博士を勧誘した。博士は當時の相場としては私が多額の報酬で、紐育生命の醫長の地位にあるを知り、其を捨て前途見透し難き新會社を發起することを難ぜられたが、私は博士に答へて、醫師として三十萬圓を貯蓄するには、幸運ありても一生を費さねば出来ぬ、然も其位の金では社會的に盡さうと思ふても何事も出来ぬ、

保險會社を起し成功すれば、他人の金なれども、少くとも數百萬圓或は數千萬圓を集め得て、背後の勢力と爲すことが出来、何か社會的に貢獻する事業に従事し得るやも知れぬ、其で困難を覺悟で、新會社を發起するのであると申したれば、博士は賛成し、少數の株を持つことを承諾せられた。青山博士を株主に得たことは、學者達を株主とするに與りて非常の援助となり、工學博士辰野金吾氏を大倉氏と共に勧誘した時、博士は大倉氏に「君は工科大學出身で、工業會社を起す爲に株式募集に来るならば文句はないが、保險會社の發起を賛成し、其株主の勧誘に来るとは怪しからん、僕は反対である」と言はれ、坐が白けて閉口したが、私は「先生に大に感服しました、今まで勧誘した人が斷るに多くは能く考へて置かうとか、何んとか甘く胡魔化して逃避せらるゝに、先生は男らしく明白に謝絶せられたことは誠に心持が良い」と言へば、博士暫く沈黙し、後改めて私に向ふて曰く、「青山君のやうに妄に人に賛成せぬ男が株主になることを見ると、

君は餘程面白い人物らしい、宜しい、僕も青山君と同數だけの株を持つことにしよう」と前言を翻へし株を持たれた。或時中濱東一郎博士の言はるるには、青山君は岡本は吃度成功すると言ふて大に讃めてゐたが、君はどうかして容易に物事に賛成だと言はぬ男を、斯くまで手に入れたかと申され、青山博士も後日私に「僕は君の提灯を持ち過ぎた、或者が批評して、青山は成金でも夢見てゐるかと言ふてゐる」と話された。博士は大隈侯に愛せられ、屢侯邸に出入せられてゐたから、博士に紹介を頼みて私は侯爵に遇ひ今般生命保險會社を發起する積であるが、侯爵の御意見を伺ひたいと問へば、侯は保險會社を作るも結構だが、金が集つた時氣を付け給へと答へられた。博士は大隈侯とは親密であつたが、硬骨にて權門に諂ふことを好まず、正直にて邊幅を飾らず、曾て私に言はるゝには、近頃醫家が「日本醫學日本醫學」と如何にも日本獨特の學問があるやうに喋々するが、我醫家は今尙皆獨逸の糟粕を嘗めてゐるではないかと、又或時私は博士に向ふ

て、あなたは遅くとも死に際して、男爵の恩命を受けらるゝであらうと云へば、博士答へて死に際し、又は死後爵位を貰ひて何になるかと言はれた。之は生前に欲しいとの意味でなく、人爵など眼中にないとの心を述べられたと感じた、又博士に政治界に入られては如何と問へば、醫業も亦雞肋の感ありと答へられた。博士は獨逸通の人であるが、明治四十三年私が歐米再遊後博士を訪問した時、視察上何を最も深く感じて歸つたかと問はれ、私は數年を出でずして、英獨戰爭が起るだらうと感じて歸朝したと話したれば、博士は歐米人は算盤を弾くから戰爭はあるまいと言はれ、其後世界大戰が起つた時、博士に私の豫言が當つたと申したら、君の言ふた通りであつたなあと、卒直に頷かれた。却説會社を設立することは中々六ヶ敷ものである例に、松方幸次郎氏を勧誘に行つたことを記する。氏は當時神戸の造船所の社長として、隆々の名聲あり、大倉氏と共に面會を乞ふた時、氏は須磨の一旅館にゐられ、發起人中に梅浦精一氏の名があるを見て、梅

浦氏の人身攻撃を長時滔々と演べられた。梅浦氏は大倉夫人の父で、發起人に加へた譯であるが、松方氏が獨り喋り、他の者に話す機会を與へられぬため、已を得ず終りまで聞いてゐた。大倉氏は憤満の際は、口を噤んで無言となる癖があり、此時も一語も發しない。松方氏が漸く話し終つた時、私は簡単に梅浦氏が發起人の一人であることは、大倉氏の岳父であるからだと申したれば、松方氏は愕然として、其ならば何故早く言ふて呉れなかつたか、まあ株主五拾人中に、梅浦氏一人ゐるとなれば差支なからう、株主を多數にしたまへと申され、其處で強いて勧誘することを止め、倉惶として旅館を辭し去つた。發起人又は株主となることを承諾し、豫約申込書に記名調印しても、愈株金拂込となると其を躊躇する人が生ずる。梅浦氏の如きも拂込に際し、大倉氏に重役に選ばなければ、株金を拂込まぬと言はれ、大倉氏は私にどうしようと話されたから、私は松方氏のみならず梅浦氏を嫌ふ株主もあるにより、同氏を重役にする譯には參らぬ、兎も角

私が梅浦氏に遇ふて話さうと、直接に梅浦氏に面會し、私は大倉氏より、重役に選任せなければ貴殿は株金拂込を謝絶せらると聞いた、若し貴殿が拂込まなければ會社は成立せぬ、折角掣たる大倉氏が大に骨折り、成立間際まで漕ぎ付けて、岳父たる貴殿が株金を拂込まれぬから、會社が成立せぬと世間に發表すれば、誠に貴殿の人格を傷ける、又貴殿の重役たるを我等兩人は反對でないが、世間は五月蠅いもので、大倉氏の岳父たる貴殿が重役であれば、會社を貴殿が大倉氏と共に自由にせらるゝことを、餘り明白に世に發表するやうなもので、策の得たものと思はぬ、重役にならず私を後援せらるれば、自然私は重役同様に貴殿に相談することゝなる。心よく株金を拂込まれ後援することを示さるれば、大倉氏は親類であり、私は貴殿に好意を表し、表面に重役となつて攻撃の的となるよりは良策ではないかと説けば、氏は誠に伶俐の人で、直に承諾し株金を拂込まれ、爾來死去せらるゝまで心中は判明せぬが、表面は私を非常に信用し、氏の子息の

監督を頼みに來られて、種々秘密にすべき事柄をも物語られ、親として子を愛する心情を打明られ、此人にして此人情があるかと感じたが、然し既に成年以上の息子を監督することは不可能と斷はつた。株金の拂込を通知した時は、明治四十年の株式暴落で經濟界が急轉直下不況のどん底であり、發起人の村井貞之助氏の如きも拂込を躊躇し、新會社が多く流産し解散するから、發起人解散を勧められ、私は男が一旦記名調印し會社發起を世間に發表して、取消すが如きは感心出來ぬと言へば、氏は其様な心では實業界には入れぬと申された、其處で私は株主の多數は學者で株式に關係がなため、規定の拂込期前に續々拂込まれ、此模様では村井氏の外全部拂込を了すると思ふ、會社が成立すれば保險募集の結果保險料が集り、自然村井銀行へ預金することになる、村井銀行を拂込引受の銀行の一となし、氏の拂込金は銀行内に留め置かれて可なれば、是非拂込を頼むと説いて無事結了した。會社成立後數年村井銀行に預金を有してゐたが、村井氏が持

株を賣られたから、同銀行失敗閉鎖の時は、會社の預金は一文もなく、會社は損失を免かれた。會社成立の當時は澁澤子爵を委員長として發起せられた會社さへ、解散した程の不景氣の年であつたから、學者を多く株主としたことが、偶然成功の原因となり、又資本金を梅浦氏の如きは是非百萬圓にせよと言はれしも、明治四十年に因みて四十萬圓の少額でよいと私が固執したことも、成立し得た原因の一である。生命保險は大なる資本を要せず相互主義でも出来るもので、資本金が多額であると保險契約者の利益を殺ぎ、且つ經營者も株式配當の増加に苦辛をせねばならぬ。其等の理由にて發起會社の流産多き時代に成立したから、臺灣製糖會社の武智直道氏の如きは、特に手紙を遣して成立を祝せられた。會社を日之出生命保險株式會社と名け、明治四十年一月二十日定款を作成し二月七日に農商務省に發起認可を申請し、四月四日其認可を受けた。其頃主務省は認可を延引し、申請後一年半以上を經過するも、尙認可せざる會社さへあるを聞き、野村

子爵に依頼し、時の商工局長森田茂吉氏に宛て、成るだけ早く認可するやう手紙を書いて貰ひ、其ため申請日より二ヶ月程で認可を受け、株式第一回の拂込期日を四月二十五日とし、前に述べたる如く全部其期日に完了し、五月十一日には京橋區三十間堀三丁目の假事務所に於て、創立總會を開き芽出度會社が成立した。株主中學者として有名なる人は、既に記載せる青山辰野中濱氏の外に、下瀬火藥の發明者下瀬博士、梅謙次郎、佐藤進、佐藤昌介、古市公威、高木豊三、井上哲次郎、志賀泰山、芳賀矢一、上田萬年、坪井九馬三、高松豊吉、宮部金吾、南鷹次郎、平井晴二郎、岸清一、高根義人、岩田宙造、中村達太郎、佐藤達次郎、三輪信太郎、政尾藤吉、岡田和一郎等の諸博士である。尙珍しきは紐育生命の法律顧問マカイバー氏が、私の起す事業に賛成の意味にて發起人に加はり、後に總理大臣となる加藤高明伯が株主の一人であつたことで、加藤伯は誠に慎重に物事をせらるゝ人物に見へた。例えば或時同伯に平生愛誦せらるゝ金言を書いて

下さいと頼めば、伯は暫く沈黙してゐられ、徐に立ち上り書棚より一書を取出し、其中にある章句を書き與へられた。其は次ぎの英詩である。

"To say well is good, but to do well is better;

Do well is the spirit, and say well is the letter;

If do well and say well were fitted in one frame;

All were won, all were done, and got were all the gain".

Takaaki Kato

June 24th, 2nd Year of Taisho

曾て英國大使としてロンドンにゐられた時、大使に面會したが、其際明夜八時に大使館へ話に來れと言はれて、後に食事は出さぬ茶を差上ると附言せられたことにて、誤解を避くべく用意周到なるに感心した。序に同じく總理大臣となれる原敬氏に就ての感想を述べん、同氏は一見眼より鼻に突き貫く鋭敏さを感じしめた。氏に日本の政治家も外國の政治家のやうに、

實業に基礎を置き金を儲けて後、政治に入る方が得策でないかと問へば、氏は日本現在の状態では政治家は政治家として、専門的にやらなければ成功せぬと答へられた。さて會社は株式の公衆募集を爲さず、學者の會社のやうに見ゆる組織で成立したから、社長に博士の人を戴くが善からうと云ふ説も出たが、大倉氏は私の長き間の友人であり、會社成立に關して大に盡力せられ、且又私に全權を委任し、思ふ儘に會社の經營を爲すことに異存なく、現に氏は北海道に居住してゐられたから、氏を社長に推薦し、平取締役には淺野總一郎氏の女婿白石元治郎氏、野村子に相談上よからうと言はれた久米民之助氏、少壯實業家を基礎とする案の時、發起人を承諾し調和性に富める福島行信氏等を頼み、私の妻の遠縁にして、大倉組の法律顧問法學博士高木豊三氏、寶田石油會社々長山田又七氏を監査役に選び、五月二十九日營業認可を受け、六月二十日頃より保險募集を開始した、實に私の満三十七歳の時である。左に創立總會結了の通知書を掲載する。

拜啓豫テ御通知申上置候通り去十一日創立總會相開キ左ノ通り決議相成申候間御了承被成下度候 敬具

明治四十年五月十五日

日之出生命保險株式會社

創立總會議事要領

明治四十年五月十一日京橋區三十間堀三丁目五番地日之出生命保險株式會社創立事務所ニ於テ開會大倉喜三郎氏ヲ坐長ニ選舉ス

出席者數及委任狀

六拾八名

此株數參千七百九拾株

(總株主數七拾壹名、總株數四千株)

第一 創立總會ニ關スル事項報告ノ件

總會ヲ開クニ當リ發起人ヲ代表シテ岡本敏行ハ先ツ會社創立ニ關スル事項ヲ報告セリ其要領左ノ如シ

一 明治四十年一月二十日發起人等會社ノ定款ヲ作製シ同年二月七日主務省ニ發起認可ノ申請ヲ爲シ同年四月四日其認可ヲ得タリ
一 株式ノ募集ハ發起人並ニ贊成人ニ引受豫約ヲ爲サシメタル所滿株ニ達セシヲ以テ一般公衆ノ募集ヲ廢止シ四月四日其筋ノ發起認可ヲ受ケタル後豫約者ニ正式ノ申込ヲ爲サシメ四月二十五日迄ニ第一回ノ拂込ヲ爲スヘク之カ通知ヲ爲シ拂込ノ手續完了セルヲ以テ本總會ヲ開クニ至レリ

第二 定款議定ノ件

發起人ノ作成シタル定款ヲ以テ當會社ノ定款タルコトニ確定ス

第三 取締役及監査役ノ選舉ノ件

取締役五名監査役二名ヲ置クニ決シ取締役ノ一名ハ坐長タルベキ條件ヲ以テ其選舉ヲ坐

長ニ一任ス坐長ハ左ノ通り指名選舉ス

取締役 白石元治郎 久米民久助 福島行信

岡本敏行 大倉喜三郎

監査役 高木豊三 山田又七

第四 取締役監査役報酬額決定ノ件

取締役及監査役ノ報酬年額ヲ金五千五百圓以内トス

第五 商法第三百三十四條規定ノ事項調査報告ノ件

検査役ニ棟居喜九馬氏ヲ選舉シ其調査ヲ受ケタル結果左ノ如キ報告アリタリ

一 株式總數ノ引受アリタリ

二 各株ニ付金貳拾五圓ツ、ノ拂込アリタリ

三 當會社ノ負擔ニ歸スヘキ創立費用金壹千二百九拾貳圓參拾錢ノ支出正當ナリ

四 商法第二百二十二條第三號及第四號ニ該當スルモノナシ又發起人カ受クベキ報酬ナ

第六 其他創立總會ニ於テ必要ト認メタル事項

取締役カ會社ノ爲メニ相當ノ交際費ヲ支出スルコトハ不可ナキヲ豫メ承認シ之ヲ議事録ニ記載シ置クコトノ動議アリテ一同之レニ賛成セリ

以 上

當會社取締役ハ定款第二十三條依リ互選ヲ以テ左ノ通り決定各就任セリ

明治四十年五月十五日

日之出生命保險株式會社

取締役社長 大倉喜三郎

專務取締役 岡本敏行

第六章 保險會社經營

日之出生命保險會社が營業を開始した年は、前に記せる通り、經濟界不景氣の極度に達した時ではあるが、幸に紐育生命より手腕ある外交員を多數引連れて來たから、相當の募集成績が擧り、且つ募集區域を東京に限り地方へ出張することを翌年に延期し、經費を節約せしめたため、半年程の初年度計算に六千餘圓の利益を見た。之は少許の利益であるが、其頃成立の新保險會社が初年度に於ては、盡く缺損を出してゐる中に、日之出生命は最初の年度より缺損なく、利益を見たる唯一の會社であつた。翌年即ち第二年度末には株式に年五分の利益配當を爲し、創立の際發起人解散を唱へたる村井氏の如きは、來社して祝意を表された。斯く最初より利益を得たことは、全く手腕ある外交員を使用したためではあるが、其反面に此等の

人を操縦するに随分骨が折れたものである。一例を示せば、同年春頃、有力なる外交員二三人が報酬に就き不平を抱き、黒幕になりて新入外交員を煽動し、待遇改善を叫び、其要求を許さなければストライキすると威嚇的に請求した。其處で私は外交員全部を一堂に集めて言ふにはストライキ至極結構、去る者は決して追はぬから直に去り給へ、要求は一切承知せぬと、高壓的に申渡し一坐を見渡せば、外交員中一語も發するものが無い、數分の後新入外交員の一人豫備陸軍少尉笠井守三氏立ち上り、「諸君は要求を聞かれぬ時はストライキすると盟約したではないか、今専務が要求を容れぬと斷言したが先輩は黙してゐられる、諸君がストライキせぬならば僕一人でやる」と大言したから、私が言ふには「笠井君、坐して拙者の言を聞かれよ、當社は創業未だ滿一年にならぬ、戦争に例ふれば恰も出陣の初途ではないか、今一團の軍人が戦争の最中に報酬を増し直に賞勳せなければ、戦争は御免だと言ふとすれば、勇將は戦争の中止を惧れて其要求を認むる

か、否、眞に勇氣ある大將は、斯の如き卑怯なる兵卒と共に戦ふを耻ぢ、屠腹戦死するも其要求を聞くものでない、賞勳増給は戦争終結後にあるべきもので、戦争の初期又は最中強請せられて與ふべきものでない、笠井君は軍人生活をした人に似合はぬ言を出さる、私は甚だ了解が出来ぬと申したれば同氏は非常に剛直にて、不屈不撓の精神家であるため、再び起立し「僕は大に間違ひました、専務の言はるゝことが至當であります、今度は諸君が皆ストライキせられても、私一人踏止り會社に盡します」と一同の面前で陳謝し、其爲めストライキは起らず、年末決算に利益配當が出来た次第である。此處で笠井守三氏に就て少しく記する、會社成立後多數の社員を使用した、其中で感服する程の性格の持主は十指の内、其一人が笠井氏である、氏は氣骨稜々意思鞏固精勵群を絶する奮闘家で、勤儉身を持した。生國は山梨縣で苦學力行、兵卒より上りて少尉となり軍隊に在ると十二年、健康のために退き、明治四十年六月日之出生命創立の際、新に

保險募集の外交員となり、其熱心なる勤務振により、同年十二月副參事となり、翌年八月北海道出張所長、四十三年一月九州支部長に昇進した。氏は金錢に付き自ら節約するのみならず、會社の費用と雖も浪費せず、其例として同氏が旅行の時旅館の茶代を儉約せる逸話が、社中同人間の話柄となつた。氏或旅館を出發する時其主人を招きて曰く「私は保險會社の支部長だが至つて貧乏、其故自身で茶代を奮發する譯にゆかぬ、會社の金は制限があつて無暗に支出する途がない、之も駄目、併し茲に五十錢ある、之は少額だが私の寸志だから受けて貰ひたい、他日大に金持になる宿望を抱いてゐる、志を得たらば大にはづむよ」と愛嬌を以て赤裸々に話す爲に主人恐縮して「なあに茶代なんか、どうでも宜しい、毎度お泊り下さるだけで結構です、女中等氣兼ねないお客様だと喜んでゐます」と答へたさうだ。氏熱烈に奮闘活躍し遂に肺結核に罹り、明治四十四年十二月須磨療病院にて永眠せられた、時に年齢三十七歳、氏が部下を獎勵せし短文書の一を左

に掲ぐ、

「天才とは其實耐久勤勉の力のみ、失敗と成功との間隔ハ其微細なる間髪を容れず、之を越え若くは其上に立つて猶且之を知らざる程のものなり、幾多の人士ハ今少しの盡力と忍耐とに依て成功を贏ち得べき時に當て其事を放棄したりき、潮流は其退く如く亦進入す商業に於ける豈又之と異ならんや、時としては其將さに成功に轉ぜんとする時反つて其前途甚だ闇黒なるが如し、今少しの對抗力、今少しの盡力、而して全敗の如く思はるゝ者が光榮ある成功と化する事なしとせんや、放棄することなくんば失敗する事なし、敗北ハ常に自家より來ることを記憶せよ、以上の言は殊に保險業者に取りて服膺す可き眞理を含有す、故に予は諸君が己を省み自己の弱點を研究して之が防備をなし又自家の事業の智識を増加す可し、此等の智識に加ふるに熱心、樂觀、決心、及忍耐を以てせば諸君の成功期して待つ可し、四圍の狀況は良好なり、社會の人々は今日只今

生命保険の必要を有す、明日と云はず今日は諸君の多望なる好機なり、予は切に諸君の奮闘を祈る、

明治四十四年五月三日 九州支部長笠井守三

笠井氏より尙早く死んだ支部長に鹽澤富太郎と云ふ人があつた、信州の人で以前は相當の資産家であつたが、生絲商買で損をして、明治四十一年一月入社し、外交員見習として東京で活動せられ、或日私に言はるゝには、外交員の控所にゐると社員中、種々専務の悪口を云ふ者がある。斯る輩は宜しく制裁を加へては如何と、私は氏に答へて數年紐育生命に於ける經驗に據ると、保險外交には海山千年式の者を使用せねば、良好の成績を擧ぐることが不可能である、重役の悪口を言ふ位の者でなければ募集員には適せぬ、唯成績を擧ぐるや否やに因つて處分すれば可なり、私の悪口を言ふことは齒牙にかくるに足らぬ、捨置いて其者の成績を見給へと申した。後日氏は感嘆して専務の言の通り、悪口を吐くものが反つて外交上の成績を

擧ぐると言はれた。氏は名古屋支部長に登用せられ數月非常なる活動を爲し不幸にして同年八月突然永眠せられた。明治四十三年五月第二回目の歐米旅行の途に就いた。此行は會社經營の方法が、歐米に於ける保險會社創立當時に取りしものに似たるやを比較研究しやうと思ひ、出發したのである。東京より敦賀に向ひて行く汽車中、偶然梅謙次郎博士に遇ふた、氏は遠からず官職を辭し、辯護士を開業する計畫だと話されたが、私が歸朝する前に、腸窒扶斯(?)にて死去せられたことを後日知りて驚いた。敦賀より浦鹽に向ひて乗船したが、日本海の荒波に遇ひて船酔ひに苦んだ。西比利亞鐵道の汽車中には先きの九州大學總長眞野文二氏、明治學院總理井深梶之助氏がゐられ、露都ペターヌブルグでは本野大使に遇ひ、其紹介にて同市の保險會社を訪問し、通譯者には大使の好意で大使館員を頼むことが出來て、重役に遇ふため同行すると、案内に出たる門衛に一ルーブル(當時一圓)心付を與へよと注意せられ、露國にては、チップを與へる習

六八

慣の盛なるに驚いた。餘り著くならぬ前に伊太利に向ひ、ミラン、ベニス、フロレンス、ローム、ネーブルス、ボンベイ等を見物し、伊太利よりハンガリのブダペストに行き、ヴィンを経て伯林に着した。著名なる保險會社を視察した後、英京ロンドンに至り開會中の日英博覽會を見た。故山座圓次郎氏大使館參事官として在勤せられ、晩餐に招待せらる。客中に大谷光瑞伯水町袈裟六氏九條男夫婦等を見受けた。ロンドン滯留の時、棟居氏の許に養女となれる長女登榮の死去の報道來り悲痛の思をした。英國を去るため其頃世界最大と稱せられ善美を盡せる汽船モレタニヤ號に乗り、リバープールより大西洋を渡り紐育に達した。同船は今年即ち昭和十年に古鐵の値段で賣却せられ、終焉の報告がロンドンのタイムズ新聞紙上に記載あるを読み、轉た感慨に堪へぬ。紐育生命保險會社の本社に行き社長キングスレー氏を訪ひ、新會社を設立せしことに就き辯解しやうと試みたが、氏は米國の保險會社告發事件以來、新會社が發起せられたる數非常に多く、

日本の新會社など問題に非ずと答へて意に介せず、總醫長ヴァンタプール博士は私を種々好遇し他意なきを示された。クリブランド市に行き、オプソン教授を訪問し其客となり、桑港よりコリア號に乗船し、ホノル、を経て九月九日朝横濱港に歸着した。私の外遊中會社の經營に任じた人は、事務の總括には柏木竹次郎氏、外交方面の監督には高橋理吉氏で、柏木氏は紐育生命日本支社の會計課邦人主任たりし人で、創立の際日之出生命へ入社し、謹嚴篤實にして志操堅固、近代人に稀なる人格者、私の女房役として貢献せられしこと多大である。高橋氏は友人小島碩鳳氏の紹介にて入社し、奇策縦横眞に智囊と稱すべき人物であつたが、惜哉大正十年私が三度目の洋行より歸朝前に、不治の病に罹り、其長逝に當りて病床にて漸く會ふことが出来た、氏の手腕を借りて尙事業を起さうと考へつゝ、歸朝すれば、運命は前途有望の人を拉致し去つた。私が不在中、紐育生命より連れ來りし外交員の有力者が社員を煽動し、團結して他會社に高給を以て身賣りせ

んと企つる旨、歸朝前に通報を得たるにより、歸着後直に煽動の張本人等を罷免し、陣容を新にし募集上大馬力を出して、幸に其年度末にも相當の利益を見ることが出来た。大正元年度には株式配當八分を爲し、翌年神田區淡路町の營業所狹隘を感じたるにより、京橋區三十間堀一丁目三原橋の東北の角に、故三橋四郎工學士に新築設計を依頼し、同年十二月建物落成し會社を移轉した。此家屋は大正十二年の大地震に焼失し今日は存在せぬ。大正二年度末には株式に割の利益配當を爲し、定款規定の最高率に達し、爾來其以下に降つたことはない。保險會社の利益は契約者の保險料金積立より生ずるもので、株主が無制限に配當を受くべき性質のものでない、其故當社の定款には配當率を割以内の制限を附したが、私が隱退後他の人の手に經營が移りて、折角取決めてあつた配當率の制限を撤去することを申請して、主務省が之を認可した。之は保險の精神に背くものと思ふ。日之出生命は保險會社の社交團體たる保險協會に加入し、私は同會の研究部

委員の一人となつた。其頃研究委員は第一相互の矢野恒太氏、帝國生命の北里袈裟男氏、明治生命の海老原介太郎氏、共濟生命の甲能順氏、仁壽生命の玉木爲三郎氏、及び日清生命の池田龍一氏であつた。保險會社は銀行と性質が違ひ、諸會社の募集競争烈しく、手腕ある外交員の爭奪甚しく、互に嫉視し時には中傷する程で、小中會社は大なる會社の庇護を受けざるのみならず、反つて壓迫を受け解約に脅かさるゝ有様で、中小會社の重役は必しも大會社の重役に頭を下ぐるものでなく、協會中に於ても稍反目のやうに見へた。保險會社が一致團結し投資を爲さば、財界に於て一大勢力となるに關はず、各自個々別々に資産を運用し、偶には三四の會社が共同放資することあるも、多數一致して行動する機關がない、其處で私は米國にある保險會社と連絡ある信託會社の如きものを、日本に於ても會社連合で作つたら良からうと考へ、之を帝國生命の社長福原有信氏に話したことがあつた、此話は我邦の信託會社の魁、日米信託會社が成立せざる以前で、

帝國生命が日米信託會社の株式募集に應じた際、福原氏は温厚の人であつたから、私に兼て信託會社の話を聞いたが、日米信託の株を持つことにしたからと挨拶せられ、愛國生命の社長鈴木萬次郎氏は群雄割據の保険界で、共同の會社設立など賛成する筈がないから、計畫は止め給へと申され、結局具體的にならず終つた。然し後に協會に於て放資調査委員なるものが出て、私も其委員の一人となり、他は太陽生命の清水文之輔氏と萬歳生命の藤村義苗氏であつた。或時帝國生命の北里氏が私に言はるには、明治生命の社長阿部泰藏氏は我邦生命保險會社の元祖と云ふべき人で、協會は未だ同氏を表彰せぬから、明治生命の海老原氏より表彰會を發起して呉れと云はれ大に困りてゐる、君一つ骨を折つて呉れ給へと。其では私が發起して見やうと答へて、先づ矢野恒太氏に直接詢つたが、氏は手紙にて時期尚早であると斷り、鈴木萬次郎氏も同様の理由にて發起に反對し、栗津清亮博士の如きは極力反對の説を唱へた。其處で一策を考へ、保險會社重役連

が毎月一回新橋花月で晚餐を共にする月一會の當番幹事が私に當る時を俟ち、其幹事になつた月一會の席上で、私は幹事としての挨拶のため起立して、阿部氏表彰會を今夕列席の重役諸君が、皆發起人となり成立せしめらるゝを乞ふと演べた。斯く公然と發表したるため、何人も反對するものなく、表彰會成立の運びとなり、遂に保険界のみならず實業界全體の賛成となつて、阿部氏表彰會を盛大に舉行することが出来た。

第七章 銀行及化學工業

株式會社經營に就て熟考すると、會社創業の際は種々困難に遭遇するか
ら、野心家が株主中にあつても、最初より重役の地位を乗つ取り困難に當
らうと企つるものは少い。利益が多くなり積立金が増加すると、會社の金
を自由に爲たい者が現れて来る。折角苦辛して築き上げたる地位を失はず
とも、重役を掣肘することを計るものが皆無と、保證することは出来ぬ。
之を防ぐには株式の過半数を所有することである。自身獨りが其だけ所有
することが困難であれば、自己の親友間に所持して貰ふやうにすること
ある。私は漸次日之出生命の株式總數の四分の一即一千株を所有し、大倉
喜三郎氏は六百株を有してゐらるゝにより、兩人間に契約書を交換して、
萬一死亡の際は、殘留者へ其株を譲り渡すとの約束を爲したが、兩人の株

を合して半数に達するには、尙四百株不足である。保險株は其價格年々騰
貴し、此不足株を買入れ、又は萬一の場合大倉氏の株を譲り受くるやうに
なる時は、銀行より借金をせねばならぬことは明瞭である。持株を擔保に
入れて銀行より借金をすれば、銀行が善且つ大なれば格別心配することを要
せぬが、若し銀行を撰擇する餘裕なく、中位の銀行より借金をし、其重役に
野心家があれば、利息に追はれて城を明渡さねばならぬことゝなる惧があ
る。結局一番安全の方法は自己が銀行を經營し、必要に應じて株式を其銀
行に買取らしむるにある。其處で整理濟なる銀行を手に入れやうと探せば、
丁度京都の大澤善助氏が福井縣にある第九十二銀行を買収せられたが同氏
の脱税問題が突發し、銀行經營を中止して、其を讓渡さんとしてゐらるゝ
と聞込み、交渉の結果第九十二銀行を買受け、先づ直に取付けの惧なき据
置貯金を取扱ひ京橋區壘町にて銀行業務を開始し、頭取を置かず、私が專
務取締役となり、大倉氏及福島行信氏を取締役に頼んだ。貯金が五十萬圓



程集まつた時、決算上露骨に缺損を出して、株主中將來苦情を言ふかも知れぬ分子を驚かし、其株を買取りて淘汰し、明治學院同窓の一人たる中島久萬吉男に話して、同氏と關係ある古河家をして銀行の後援者たらしむることに盡力を頼んだ。中島氏は私を古河系に入れることに斡旋せられ、銀行の株九割以上を引受け、缺損金を補填せしめられた。然るに其後古河家の番頭中、銀行經營を爲すならば、寧ろ新しく銀行を發起し認可を受くる方がよいと唱ふる者ありて、其勢力が同家に於て強大となりしため、私の銀行には餘り力を入れぬやうになつた。又中島氏を信用して或會社に十萬圓貸與したが、其會社は不幸にして失敗し、貸金を返却し得るやを心配することゝなつたが、私は飽まで中島氏の手腕を信頼し、同氏に其解決の責任を負はしめた。氏は其失敗會社の所有する大分水力電氣會社の社債を、借金額に充當し得るだけ持參せられ、貸金と相殺し、大分水力が九州水力と合併して九州水力社債となり、賣拂ひて貸金全部を回収し得た。其處で

考へたには、僅少の貸金をしても此通り危険である、預金が増加するに従ひ金利を稼せぐには、金を貸さねばならぬ。借るものは幾人でもあるが、良擔保を入れて借る者を見付けることは中々苦辛を要する、曾て第一銀行頭取佐々木勇之助氏が私に向ひ、事業家でなくて既に保險會社を持つてゐるに何の必要あつて銀行業を始むるやと言はれたことを憶ひ出し、成程金を使ひ得る事業に關係なきに金を集むる時は、其預金を消化することに甚だ困難を感ずるものと悟つた。銀行業に従事した人の説に、銀行預金總高の二割位は腐つてゐると、其意味は整理すると二割程貸倒れが出るということである。之では保險に成功しても、長き間には銀行に貸倒れを生じ、差引して後日困難に遇ふかも知れぬ。單に日之出の株を買取る手段のため、此危険多き銀行經營は考へものだと自問し、株を是非買はねばならぬ場合には、寧ろ自己の所有株を高値に賣つて、隱退する方が得策と考ふるに至つた。始め保險會社を發起する時、他人の金と雖も、背後に數百萬圓

若くば數千萬圓を有すれば、社會的に仕事が出来たらうと思ふてゐたが、實際經濟界の事業に當ると、其金を安全に投資し運用するだけで苦心慘憺せねばならぬ。其金が自己のものなれば損失があつても、運命と悟れば差支ないが、他人の金であると連も骨が折れて、他方面に活動することは六ヶ敷、世間は中々理想通りに行かぬことを感じ、自然社會的に活動する念慮が薄らいで來た。然らば自己の資産を作ることとはどうかと云ふと、スベキユレーションをすれば或は相當の資産が出来るだらうが、其反面に會社を危険に瀕せしむることが生ぜぬとは保證が出来ぬ。五十萬圓でも三十萬圓でも生活を目的とするならば、其額で澤山、多い程子供が馬鹿になるのみ。資産を多く作らうとする者は良心があつては六ヶ敷、概して金満家は無理して金を作つたもので、今其一例を挙げやう、數百萬圓を有する或財産家が私に言ふには、友人が金を借りたいと申すが自身が貸すと中々返済せぬ、どうか第九十二銀行より金を貸してやつて呉ないかと、私はあなた

が保證人となるならば貸しても宜しいと答ふれば、其人が曰く勿論保證人となるが其代りに利息は安くせず高く取り、其中より保證料として二分自分に與へよと。自ら友人のために借金を頼みに來て、保證料を請求する押の強さに感心した。此様に抜目なく金を儲けるには、矛盾することを言はうが無頓着であらねばならぬ。又有名なる富豪の令嬢で養子を夫に持つ婦人に、或人の保證で一萬圓程貸したことがある、之は親にも夫にも秘密であるから、人に話さぬやうのことであつた。斯く親や夫に内密に借金する婦人は、俳優等と浮名を流す連中である。富豪の子供は男女の別なく、放縱なる生活を爲す傾向を有するから、贅澤なる生活を爲たいために、金を作るは考へものである。斯く感じて銀行は中止することに決し、手數をかけて預金を盡く返済し、第九十二銀行を故藤本徳之進氏に譲渡した。銀行經營を思ひ立つ前、明治四十五年に巢鴨町に於て、石輪製造所を設立し、義弟上野正人をして監督せしめた。此工場は義弟に職業を與ふるためと化

學工業經營の經驗を得るためとの理由にて設立したのである。或友人の推薦により、石鹼業に従事せしこと三十年と稱する三木某なるものを雇ひて製造を始め、鹼王堂と名け、専ら石鹼問屋の下受製造を目的とした。然るに問屋の注文に應じ、三木が指圖に従ひ製造を始めても、注文通りに石鹼が出来ず、已を得ず私自身で英文の化學書を手にして、毎朝保險會社へ出勤する前に、早朝より此工場に至り、三木を相手に石鹼製造の實驗を行ひ、衣服は油に染み手指は汚れ、屢家内の小言を聞きしが、忍耐勉強の結果三ヶ月後には、意外にも良好の石鹼が造られ、問屋の注文に應ずることが出来、漸次成功に向ふたが、義弟は私の監督を受けることを嫌ひ、不平を洩すこと多きゆへ、當方の出資を貸金に變じ、工場全部を同人に與へ、勝手氣儘に經營するやう放任し、其代りに以後要する資金を斡旋せぬことに決めた。大正十二年の地震に際し、下町にある工場が火災のため全滅し、高臺の巢鴨にある鹼王堂は一時隆盛となつたが、放慢なる經營の結果、今より

數年前に、該工場は多大の借金を負ふて閉鎖する運命となつた。工業は専心事業に熱中する當業者を得、且つ流動資本が豊富でなければ成功覺束なきことを經驗した。

第八章 隱退

大正七年世界戦争が終り平和の電報が來りて、我邦の經濟界は大なる衝動を受け、株式の値段は暴落し、社債公債等も亦下落し、保險會社の資産評價に影響し、其損失が顯著であつたから、大に考慮の必要を感じた。此戦争の結果奥匈國は瓦解し、露西亞及び獨逸の帝室は王冠を喪失し、戰勝國と雖も多額の負債に呻吟する有様で、此調子では十數年若くば數十年、世界の動搖は停止することなく、従つて經濟上大波亂起り、我邦も其影響を被り、日之出生命の如き小會社は、其大波に攫はれるやも知れず、之を防禦するため早晩轉機を取らねばならぬ。保險會社としては唯二つの避け途あるのみと信じた。一は他會社と合併して大會社にすること、他は大富豪に經營を委ねて、萬一缺損を生じたる場合には、容易に埋合せの金を支出

し、其缺損を填補せしむることである。斯く思考しむる際、社長の地位にある大倉喜三郎氏は戦争中種々の事業に關係し、三四の會社の社長となつてゐられたが、平和になると、其等の事業が盡く悲境に陥ち入り、恢復絶望の状態となつた。大倉氏が日之出の社長となられた時は北海道に住居せられ、問題となるべき會社に關係なく、二年後に東京へ轉住せられて、戰爭中銑鐵澱粉石油等に關する新設の會社に社長と擔がれ、私は此等の會社が發起せらるゝことを聞くや、責任ある地位に就かざるやう氏に忠告せるも、陽に私の意見に従ふと言ひて、陰に關係し終に社長となり、戦時の好況時代に株を賣り利益を得て、責任の地位を退くやう重ねて勸告せしも従はず、遂に諸會社同時に缺損を暴露し、株主總會にては重役の責任を問はれ、缺損を填補せよと請求せられ、重役仲間よりも、社長として無責任なりとの批難があり、日之出の重役中にも、大倉氏の失敗が同社に影響するを危惧するに至り、私は意を決して大正九年の定時總會前に同氏に勸告し

て、社長を辭せしめ相談役とならしめた。私は日之出の金を一錢たりとも、同氏の關係事業に投資せず、反對の意志を表示してゐたから、日之出は少しも損害を受けずに済んだ。氏の叔父も事々に反對してゐられて、氏の失敗を救済せず自然の成行に任されたやうである。大倉氏の社長辭職後一年間社長を空位としてゐたが、重役中私に社長になりてはどうかと言はれた人もあつたが、私が社長となりても實力が増す譯でなく、會社創立以來私の意の儘に經營して來たのであり、社長となつても名を添ふるのみで、會社の前途に大なる光明を期することは望み難く、寧ろ此際前に陳べた通り、會社を富豪に託するか又は他會社と合併するかの機會を掴むことが良策と考へつゝあつた折柄、淺野總一郎氏の婿白石元治郎氏は、淺野氏が某保險會社を買ひたき希望を有せらるゝため、私に其會社の内容を取調べる道を問はれた。白石氏は私が銀行を開業した際、淺野系に入れやうとして淺野氏に紹介せられ、淺野氏は食事を供して好意を示され、同系に入ることに

就て大倉氏に相談したところ、氏は淺野氏の性格に對して、信用出來難きを私に説明せられたゆゑ、同系に入ることを躊躇して來た。今淺野氏が保險會社に色氣があるを知り、私は白石氏に取締役として内容を知悉せらるる日之出生命を買取りては如何と語り、先づ私の株を相當の値段にて引受け、然る後他の株を過半数に達するまで獲得せらるれば、純然たる淺野系の保險會社が出來ると話した。氏は淺野氏に相談し、私の株を申出の價格より随分値切りて買ふことに決められ、愈覺書を作成することになつた時、以前紐育生命の福岡支部長であつて、今は淺野氏の片腕となれる橋本梅太郎氏を同道し、文書を以て覺書を作ることを拒み、口約のみにて取引せんと言はれたから、私は甚しく不安を感じ、常に同情を示されたる福島行信氏に淺野氏讓渡の件に就て話たれば、氏は淺野氏へ賣渡すに極力反對せられ、他に何人かなきやを問はれたから、下郷傳平氏は兼て私に日之出の株を賣る時は知らせて呉と言はれしを憶ひ出し、下郷氏に讓ることに反對な

りやと問へば、下郷氏なれば差支なしと答へられた。此時白石氏は旅行中であつたから、私は橋本氏に遇ひ、日之出の株を淺野氏に賣渡すに就き他の重役が反對し、大に困難してゐると話したれば、橋本氏曰く淺野氏は強いて日之出の株を買ふ考へは無い、其様に反對者があるならば私の株も賣らず、從來通り日之出の經營を繼續してやるがよからうと。此様に淺野氏の方で餘り熱心に買ふ氣がなく、文書を以て覺書を作るを拒まれしは、株の價格を尙一層安くせしむる考かも知れぬと疑ひ、意を決して下郷氏に私の株を譲ることにして、同氏に交渉したところ、氏は直に承諾し覺書を交換せられた。氏は仁壽生命の所有者で、場合によりて日之出を合併することとも出来、又他の富豪に賣渡さるゝことは私より容易に爲し得る地位の人である。同氏に讓渡すことに對しては株主中一人の反對者なく、誠に圓滑に取引が済み、實權を同氏へ渡し、氏と私は相談役となり、福島行信氏は社長となられた。買收後下郷氏は資本金を百五十萬圓に増加することを主

務省へ申請せられ、其認可を受けられた。之は米國邊では Watering 水を加へると云ふて、牛乳ならば水を加へて量を増し、質を稀薄とするも儲けは多くなることで、株式も數が多くなりて、結局總額に於て高値に賣ることが出来るためである。此増資の考へは私の心にも生ぜざるには非れども、發起の際資本金百萬圓にせよとの要求を退けて、保險會社は資本金が少くても出来る、否少い方が契約者の利益だと話したことがあるから、増資を企つることは食言することになる。セキスピアの言ふ通り、良心は人を卑怯者にするとは眞實である。天は二物を與へぬ、金儲と理想は兩立せぬ。數年を出でずして下郷氏は日之出生命を住友家に譲り渡され、私が希望せし如く、大富豪の手に委すことになつた。住友家は會社の名を變じて住友生命保險株式會社と名づけ、私は相談役を辭した。隱退後生命保險に關し大なる疑問を抱くやうになつた。其は獨逸が大なるインフレーションを起し、通貨マルクを極力下落せしめ、兼て保險を附したものが高値の料金を

拂ふたにも關はらず、一萬マルクの保険金を貰ふても、靴一足さへ買へぬやうな慘酷な目に遇ふたことを思へば、十年二十年又は終身と、長期の保険を附する者は戦争の危険ある今日の状態では、獨逸の行ふたやうにインフレーションが生じ易く、従つて通貨の暴落が起り、保険契約者は保険の効能を受けざるやうにならぬとは、誰が保證し得るや。貨幣價值が變動しても、保険の目的を成就せしめる仕組が發明せられねば、生命保険も火災保険の如く、短期間の一年乃至五年契約が正當のものであると信ずる。然し人間の智慧は未だ充分發達してをらず、地震などに遇ひても市街道路の擴張が經驗を無視して、小規模に行はれ、情實纏綿のため當局者の理想を實行し得ざる社會では、失敗の歴史を繰返へすやうに思はれる。大正十年四月保険業の實務を離れて歐米漫遊の途に上つた。四月十五日横濱より香取丸に乗船してシアトル港に向ふ、シアトルまで四千二百海里、船中種痘をなす、シアトルよりシカゴ市を経て紐育に行き、同港よりセドリツク號

に乗り、リバプール港に上陸し、五月二十三日ロンドンに着す。トーマス、クック社の取扱にて遊覽自動車に乗り、英國の湖水巡りを爲し、エデンボロに至り、尙蘇國北部のインバネスに達した。七月十四日ドゥバー海峡を越へて巴里へ行きグラランド、ホテルに宿す。佛國では戦場の一部 Chemine des Dames とラン市の大伽藍の破壊を見て、ブルツセルを経て伯林に入り、伯林より漢堡に至り、同市の正金銀行出張所に平野氏を訪問し、獨逸銀行の株を若干買入れ、同銀行の保護預とし、別に十萬マルクを定期預金とした。此時英貨一磅は三百二十馬克であつたが、此預金は後年インフレーションのため零となつた。近來百年貯金とかにて未來の慈善のため銀行に預金する者がありと聞くが、貨幣價值暴落の經驗なきゆへ斯ることを夢みるものと思ふ。定期預金は零となつたが、株は後に高くなつて元の値段を回收した。獨逸の株式の外英米佛の株をも買ふて數年所有し、其値段の上下を研究したが、千九百三十年の世界の株式暴落前に大部分を賣つて、概し

て損を爲ずに済んだ、然し我國の金解禁等にて貨幣價值の變動のため、随分損害を受けて資産は大に減少した。米國の學者中長期放資に就て見れば、株式に投資する方が、社債にするものより利益が多いとの説を唱へた人があつたが、千九百三十年の世界株式下落の甚しきことを経験して、其論據は根底より覆へされた。經濟界は十五年乃至二十年に大變化に遭遇するものゆへ、投資するには常に眼を開き財界の動向と實相を観察することが肝要である、前に良會社と稱せられたものが、長期間には内外の事情の變化により、漸次惡化してゐることがある。十五年乃至二十年には惜むことなく全部の所有物を賣却し、新に投資物を選択することが、財産を保全する秘訣と信ずる。人生には地震とか戦争とか不慮の天災地變が生じて、永久に同一の家に、大なる財産を保有することは困難のやうである。近世にはロスチャイルド家が、奈翁戦争以來、一族中に大なる財産を所有しゐるやうであるが、之が何世紀も今後續くものであるか疑問である、然し同家が

其財産を各國に分け置けるは、今日まで永續せる原因と考へる。資産は土地株式公債社債預金と種類の異なるものに、分ちて置く方が安全である、現金又は公債と雖も、全財産を同種のものに投ずるは危険である、獨逸のインフレーションの結果にて學ぶべきである。さて伯林にて次女とし轢死の電報に接し非常に驚愕した。此事件により私等夫婦の血統中に幾分 *Miss nische-depressive* 的傾向があつて、斯く自殺者が生ずるものと疑ひ始めた。私の父は激怒し易く、几帳面で小心、悲觀的人である、母は之に反して大なる樂天家で、貧乏となり逆境にゐて、父の虐待を受けても、少しも怨言を放つたことがない、私は稍母に似て逆境に於て、其を切抜ける路を見出すことに、快味を感ずる程であるが、矢張り怒り易き性質を有する。妻は悲觀の傾向あり、時には不平を洩し、又潔癖がある。但し兩方の弟妹等及び親達の兄弟姉妹に、自殺を敢行したものを聞かぬ。伯林よりロンドンに至り、先に印度洋を経て歸朝する積りで、豫約せる船室を米國經由のも

のに取かへて貰ひ、大西洋は米國郵船にて、講和會議の際ウイルソン大統領が便乗したるジョージ、ワシントン號、大平洋は伏見丸に船室を約束した。折角歐洲に来て當時評判高き聯盟會議を見ずして、歸朝することを残念に思ひ、急遽瑞西ゼネバに至り、同會議を參觀した。九月十四日巴リのグラント、ホテルに泊れば、同ホテル日報にミラン發と題し、公然以太利駐在の日本海軍士官が同地の新聞記者に、千九百二十五年頃日米戦争があるであらうと語りりと記載しあるを見た。斯の如く日米戦争談は至る所で耳に入り、千九百十年の洋行の時、英獨戦争の話聞いたのと同様の感じであつた。今回の旅行は世界戦争の結果を視察し、其慘狀を認識したき希望であつたが、戦争終結後三年を経過したから、戦場の地面が掘割られ、鐵條網の残物を見、巴理市街の昔に比して非常に汚なくなつてゐる位で、他は戦争中食物の不自由を獨逸人より聞き、出版物によりて戦禍を讀んで知る程で、視察に行くことが少しく遅かりしと感じた。巴里より再びロン

ドンに來り、荷物を纏めてサウサントン港より米國に向ひ、紐育よりシヤトルに至り、十月二十二日横濱に着した。此度の外遊にて大なる變化を感じたことは、歐米人が日本人に對する態度である。千九百十年の外遊の際は、日本人は今日程嫌はれてゐなかつた。例えば大西洋を渡る時私はモレタニヤ號に外人と船室を共にせるも、千九百二十一年即ち此度の旅行中、紐育にある日本郵船會社々員の話によれば、外人は日本人と船室を同ふして、大西洋を越ゆることを嫌ふため、大西洋を渡る邦人は、邦人か又は有色人種と共に乗るに非れば、單獨船室即ち一人室に入り、高き船賃を拂ふことを餘儀なくせられるとのことである。私は最初より單獨室を豫約してゐたから、直接其經驗を爲なかつた。太平洋を伏見丸にて歸航する時、行違の船にて徳川公加藤海軍大將等が、ワシントン會議に赴かるゝとの無線電信傳はり、伏見丸より使節の成功を祈る旨電信を交換したが、此會議の結果海軍協定が出来て、二十年間太平洋は名に背くことはなからうと信じ

た。今年末の海軍會議にて無條約となるとも、我國より手を出さぬ限り、數年間戦争はあると思はぬが、犬養氏の暗殺以來軍人が國內政治の動向を牽制するやうになり、此趨勢は少くとも今後十五年乃至二十年繼續すると考へるから、海軍競争は結局國民負擔に堪へずして、戦争によりて解決せざるを得ぬことにならう。今日世界の經濟組織が個々の國家本位となり、經濟的國家主義 (Economic nationalism) が横行しつつあるから、早晚利害の衝突が國家間に起り、鑛物及び工業材料欠乏の國は、其豊富なる國と力争することは自然にして、力争せざれば不平等を平均すること不可能である。個人間に財産を持つ者と持たぬ者が争ふ如く、國家間にも原料所有國と所有せざる國と、争ふことは自然の勢と考へる。所謂 Dynamic state は Static-state と闘争することは必然と信ずる。運命が個人及び國家の背後にありて、dramatist & prompter として個人及び國家を、世界の舞臺に活躍せしめてゐるから、何程平和を懇求しても、不平等の存在する限り、長期の平和は困難

である、歴史は精細には繰返へさざるも固定を嫌ひ變化を好む、戦争に非れば大なる變化がない。人間は皆一度必ず死なねばならぬ、今日死すれば明日の死を免ると、解り切つたことではあるが、セキスピアの警句にある、戦争によつて一時に、多數の人間が死するも已を得ぬ、バビロン、エヂプト、ギリシャ、ローマは盛大にして今やなし、英國の大にして今日各方面に壓迫を受け、其勢力は昔日の如くに非ず。昔時羅馬に於て自由思想の極、タイラント即獨裁者を出し、寡頭政治即セネートは王政を招き、王政は軍人即プレトリアンの跋扈を來した。幕府盛となり王朝衰へ、王政復古となり自由思想時代來り、今又軍人萬能時代に歸らんとす。動は反動を生ずる自然の元則にして、何ものも之に背反することが出来ぬ。自己を宇宙の中心の如く考ふる自惚を捨て、宜しく天文學者の説に耳を傾け、我が太陽でさへ宇宙の中心でなく、尙無數のより大なる太陽が存在することを悟り、運命が指示する途を歩み、自己の信念に背かざる生活を爲して安心立命と

爲べきである。

貴賤貧富我何與
一片浮雲過太虛

(中江藤樹)

附 録

(I) 私の子供は男二人女五人ありしが、一男と稱する長男は生るゝ時難産にて長く窒息状態にてありし爲め、發育不良にて二十一歳にて死し、女兒三人中園子と名けし一人は生後一年、登榮は十一歳、としは十九歳にて死亡し、今日生存せるものは敏男さかき壽恵の三人である。三人共小學教育を本郷區誠之小學校にて受け、敏男は高等師範附屬中學、第八高等學校及び東京帝國大學英法科を卒業後、英國ロンドン市インナー、テンプルにて法律を研究しパリスタールとなりて歸朝し辯護士を開業す。さかき及び壽恵のは府立第二高等女學校を卒業し、さかきは津田英學塾にて少しく英語を學べる後、遞信官吏經濟學士今西武次郎氏に嫁せしも夫に死別して、東京女子醫學專門學校に入學、卒業後京都帝國大學産婦人科の研究生となつてゐる。壽恵のは高等音樂學校別科に入りてピアノを學び、英語を二葉女學

二
校にて練習し、三井物産會社員工學士清水新平氏の妻となり、現今夫と共に米國紐育市の附近に居住してゐる。

私の母は身長少く甚だ小さき體格を有するが、父は比較的長身に於て弟妹等は一人を除きて、皆父の長身に類似してゐる。私は母に似て男子としては高からず身長五尺三寸なるに、敏男は五尺七寸ありて祖父よりも高い。斯の如く體格は祖先に歸する傾向を有し、場合によりては祖先よりも行き過ぎることあり。精神に於ても其傾向は祖先に歸らんとするもの、如く、之は遺傳の元則として已を得ぬかも知れぬと考ふ。メンデル氏法則を人類に於て明白に見ること能はざるも、其傾向あるは疑ふことは出來ぬ。後世子孫中研究心あるもの生ぜば、兄弟姉妹の體格及性質の相違は、此法則に係するものと認識することあらん。

◇
(2)系譜類は眞を得てゐるもの、百に一二を期し難いと上田萬年博士は言ふ

てゐらるゝが、系譜も無く唯口碑的に、祖先に就て傳はるものは、尙更眞疑を明かにすることが出來ぬ。然し母方の祖母が長曾我部の子孫だから、エラクなれと言はれしことが、奮起の原因となつたから、假令間違ひであつても、祖先の起原を信ずる方がよいと思ふ。其故左に私の祖先に關する傳説を記し置く、之は父の生地近江國高島郡高島村鹿ヶ瀬淨願寺住職釋迦覺蘊氏が書き送られたものである。

岡本家に關する記録 紋は丸に橋

一、鹿ヶ瀬村鳥飼の西熊野權現社の事 大塚氏岡本氏鎌倉より此地叡山の領地に隱棲致候時熊野權現の御靈を御供申兩家替るゝ御給仕申候
一、鹿ヶ瀬村松尾明神を勸請申當村の氏神と定め大塚家岡本家兩家にて永世神主たる事。

一、岡本之祖先者橋諸兄楠木佐門兵衛之末孫也依之又用菊水紋所也。
一、當地は比叡山の領分にして悲禪寺、禪覺寺、巖雲山西方寺、遊光山

淨願寺等の諸寺有之候所織田信長の燒打に合ひ只淨願寺のみ形ばかりの庵残り候

一、大塚岡本兩家の事 遊光山の檀家に有是兩家は平家の勇士にて候ひしが鎌倉將軍より追はれて比叡山の領地に遁れ只管佛門に歸し候事

一、三浦姓以三浦大介義明爲祖、矢盛姓以桓武天皇末裔平維盛子矢守丸爲祖、大塚姓祖出天兒屋根命末藤原鎌足、岡本姓祖出橘諸兄卿

一、岡本氏は岡本又左衛門、岡本仁右衛門、岡本三左衛門の三家に別れ共に橘氏也 又云く岡本氏は敏達天皇の末也。

一、岡本三左衛門又は仲右衛門又は三介より岡本仲右衛門祖先分家す。

寛文年間歟。

按ずるに以上の記事中岡本が橘氏の後裔であるや否やは判明しないが、少くとも橘氏の末裔であることは代々橘の紋を用ゐ、元祿頃喜右衛門との稱が用ゐられてあり、且つ傳説が橘氏と云ふことによりて稍確實性を有す

と信ずる。太田亮氏は其著家系系圖の合理的研究法八十一頁に記して曰く、仁井紀四郎親清とあるは新居橘四郎親清の事であつて橘が紀となつてゐると。然らば橘が發音しにくいため紀又は喜と唱ばれぬとは言へぬ、喜右衛門は時に橘氏を暗示すると云へるであらう。寛政重修諸家譜第四輯五百八十八卷五十二頁に橘氏後裔甲斐庄系圖中、正房正述正親正永皆喜右衛門と稱せしことが載せてあり。同九十四頁には代々京師に住すといふ橘氏の岡本系圖がある。

藤田精一氏著橘氏研究十三頁に平知盛家人中に橘姓のものがゐたと掲載されてゐる。

東鑑に平家に屬する駿河國目代橘遠茂と稱する人がある。岡本は落武者の末であるが、平家の者乎、南朝の者乎又叡山の僧兵乎。鹿ヶ瀬岡本系圖は又左衛門と稱する一家に藏せしが、廢家となり其一族のもの京都に持ち行き、今は何れにあるや其住所分明ならず。三左衛門家は三之進氏現戸主

にて、仲右衛門家の當主は喜三氏即ち私の父の兄喜右衛門氏の孫なり、尙鹿ヶ瀬に住居せらる。

岡本喜三氏家の過去帖は次ぎの通り。(延寶元年は今より二百六十二年前)

忌日	名	法名
延寶元年六月十一日	中右衛門妻	尼妙通
延寶三年四月十二日	中右衛門父	釋西念
天和三年正月八日	中右衛門母	尼妙海
貞享二年二月四日	中右衛門父	釋西雲
元祿十四年二月廿八日	喜右衛門祖母	尼妙圓
正徳二年九月十五日	喜右衛門子	尼妙玄
正徳三年十一月十二日	中右衛門娘	尼妙意
享保二年正月二十日	喜右衛門祖母	尼妙貞

享保九年九月廿五日	東手 仲右衛門	釋祐意
享保十八年八月七日	仲右衛門父	釋西念
寛保二年十月廿五日	東出 仲右衛門母	尼妙信
寶曆八年七月十六日	喜右衛門母	尼妙專
安永五年四月廿七日	喜右衛門子	釋了玄
安永六年十二月廿七日	喜右衛門親	釋西雲
安永十年三月十九日	喜右衛門妻	尼妙意
寛政十年二月十六日	喜右衛門	釋教西
文化元年四月九日	仲右衛門母	尼妙善
文化二年一月廿五日	仲右衛門妻	尼妙證
文政十年十一月六日	喜右衛門妻	尼妙光
弘化四年一月廿三日	仲右衛門父	釋歡受
嘉永七年三月十三日	仲右衛門妻	尼妙導

明治二十六年四月十三日 同人後妻 尼妙曉
 明治三十一年五月三日 仲右衛門私ノ祖父 九十歳 釋淨刹
 明治四十一年三月廿四日 喜右衛門私ノ父 釋是信
 大正五年一月廿三日 喜三太母 尼誓雅
 大正九年二月七日 喜三太 釋飯正

母の木津氏に關して滋賀縣大溝町笠井氏の取調べによると、木津氏は宇
 多源氏佐々木信綱の末裔永田氏より出でしと云ふ。木津本家と稱する大溝
 町大字永田木津松太郎氏の系圖によれば左の通り。 紋 四目結

信綱 泰綱五子 永田民部少輔 重秀右近太夫 秀宗右近右衛門 二子 木津刑部少輔
 秀宗二子 午之助 氏宗二子 木津但馬守

右の系圖は尊卑分脈の記事と合はず、即ち尊卑分脈には永田系を信綱の
 子高信 胤信永田七郎より出づるとなす。木津氏は永田氏の苗字を改めし
 ものにして、織田信長時代に永田刑部少輔永田左馬介等あれば、信長時代

若くば其以後木津氏を稱せしものならん。

母所有の過去帳

元祿元年九月十日 名不詳 釋道味
 元祿二年十二月廿九日 名不詳 妙頓尼
 享保三年一月廿四日 南三門 助九郎父 釋教西
 享保三年十月八日 石垣 嘉藏妻 妙證尼
 享保九年十一月廿四日 名不詳 釋宗玄
 享保十一年九月七日 名不詳 妙玄尼
 寛保二年三月廿九日 石垣 名不詳 知光尼
 延享三年十月廿九日 石垣 彦兵衛 釋淨雲
 明和三年七月二日 彦兵衛妻 妙雲尼
 明和八年十一月十九日 五郎右衛門子 智誓尼

天明三年十一月十二日	同人妻千代	妙誓尼
寛政二年九月十五日	名不詳	釋淨喜
寛政十年六月二日	五郎右衛門 <small>子與市</small>	釋智成
寛政十一年正月八日	五郎右衛門 <small>石垣</small>	釋淨信
享和元年八月五日	彦右衛門 <small>妹松</small>	妙昌尼
文化二年六月廿四日	彦右衛門 <small>養母</small>	妙全尼
文化三年八月廿五日	彦右衛門	釋壽閑
文政十年六月二日	彦右衛門 <small>息鐵二郎</small>	釋順淨
文政十二年二月廿五日	彦右衛門女	妙淨尼
弘化四年正月二日	彦右衛門母 <small>私の母の父</small>	觀淨尼
嘉永四年八月十六日	彦右衛門 <small>私の母の弟</small>	釋觀良
安政五年十一月十三日	彦次郎 <small>私の弟</small>	釋觀道
明治十四年七月三十日	岡本捨次郎	釋即正

明治三十一年四月廿五日
 明治四十一年九月四日

彦右衛門妻とえ
 岡本喜六

妙誓尼
 釋信喜

祖母長宗氏の祖 紋 酢漿草

祖母長宗とえは高島郡安曇村庄堺長宗金六郎の二女にて、木津彦右衛門に嫁して私の母を生んだ人である。祖母は前に記せし通り、私の幼少の時系圖を示したが、私の記憶に存することは長曾我部盛親の子孫であるだけで、野史卷百三十三に記しある盛親の子五人中、三人殺され、残りし二人即ち盛高盛定の何れか、其系圖に記載しありしや、今憶ひ出すことが出来ぬ。

長曾我部氏は秦始皇帝の後普洞王より出づ、其後裔秦川勝の子孫土佐長岡郡曾我部の郷に住し、長曾我部と稱し國親の子元親の時、土佐一國の主たるを甘んぜず、更に四國を討平せんと欲し、屬兵を阿波及伊豫に出した。

文化三、五、廿七 深見嘉七宗壽三男 隆應昌山居士
 文化三、七、二 直右衛門 福峯宗壽居士
 文化四、七、十 直右衛門妻 寬寶智性大姊
 文政二、六、二 名不詳 綠峯智玉童子
 文政五、二、九 水野嘉助娘 幼香妙心童女
 文政十一、三、十八 忠重二女 翠相幼夢童女
 文政十一、三、廿七 水野平右衛娘 觀月覺心童女
 天保二、七、廿五 西田藤次 全岳良瑞居士
 天保三、七、廿一 新太郎忠重三男 晶岩幼瑛童子
 天保六、二、廿四 佐邦六十三歲 松風院靈岸道壽居士
 天保六、五、十三 槌之助忠重四男 玉芳幼資童子
 天保八、六、十三 竹中仁助新次三男 鐵岩宗心居士
 天保八、六、廿一 竹内なみ新次四女 覺心貞性大姊

天保十一、十一、十九 水野宇の新次二女 了譽妙貞禪定尼
 天保十五、二、朔 井尻武八 麟山智角居士
 弘化四、四、廿五 櫛原今直右衛門女 本譽覺山貞心禪定尼
 嘉永五、三、十七 名不詳 釋了心
 嘉永六、二、廿一 西藤田次妻千賀 全窓貞倫大姊
 嘉永六、七、十 新次妻 貞教院松岸清壽大姊
 文久元、十、廿二 新次末女阿愛 教岩智愛大姊
 慶應元、十二、四 新次忠重 顯照院岩鍛勝弼忠重居士
 明治二、七、十二 新次妻 顯相院壽山妙貞大姊
 明治十八、八、卅一 佐壽長女鑑能 貞鑑院鏡山智淨大姊
 大正四、一、四 佐壽七十七歲 老松院盤山文忠居士
 大正十、七、四 佐壽妻ゆき七十七歲 貞松院雪山妙順大姊



橘氏

(尊卑分脈十一)

第廿一代
敏達天皇

難波親王 大保王
母夫人春日孝女子娘 贈正二位

栗隈王

攝津大夫
太宰大貳
治部卿(正四下)
美好王
贈正二位

和銅元十一廿五天皇宴會群臣葛城王賜浮盃之橘敕曰是以爲汝姓
天平八十一、葛城王與弟佐爲王賜橘宿禰今日改名諸兄
天平勝寶二正廿七改宿禰爲朝臣同九正六薨七十四歲號井手大臣或西院大臣
長者 左大臣 參木左大辨侍從本名葛城王

諸兄
母從四下縣犬養東人女

奈良麿
母淡海公

天平勝寶九七二被誅卅七歲
賜太政大臣正一位
長參木左大辨正四下

葛城王 左大臣贈正一位
天平寶字元正六日薨(イ本無葛城王)

從五上
大膳大夫
正五下
尾張守

長盛

侍從中宮大夫
正四上

佐爲

綿裳

圖書頭
大納言雄友母

左京亮
高成

春成

秋實

長盛

文章博士
式部大貳
武藏守從五下

長、
春官亮
兵部大貳從四下

島田麿

承和十四二十九薨六十五歲
號後井手右大臣贈正一位
右大臣從二

貞觀二十廿九薨五十七歲
丹波守相模守 右中將
中納言正三

忠幹

直幹

列相

贈大政大臣
清友

氏公

峯繼

少納言從四下
安麿

神祇伯正四下
氏人

承和十二七卒
左京大夫從四上
弟氏

仁明天皇皇后
太皇太后嘉智子

相模守左中將
因幡介陸奥守從五下
真直

侍從
少納言從四下
清蔭

紀伊守從四下
春行

從四上
少納言
實利

播摩守左兵佐
左中辨從四下
入居

入居ノ子入居ノ子從五下
永繼・永名・逸勢
右中辨 播摩守 ハヤナリ

右大臣藤三守室
女子

大日本史
ニアリ
女子

宮内卿
正三下
正通

伯耆守從五上
真材

若狹守
阿波守從五上
峯範

近江守
文章博士
式部大貳正四上
廣相

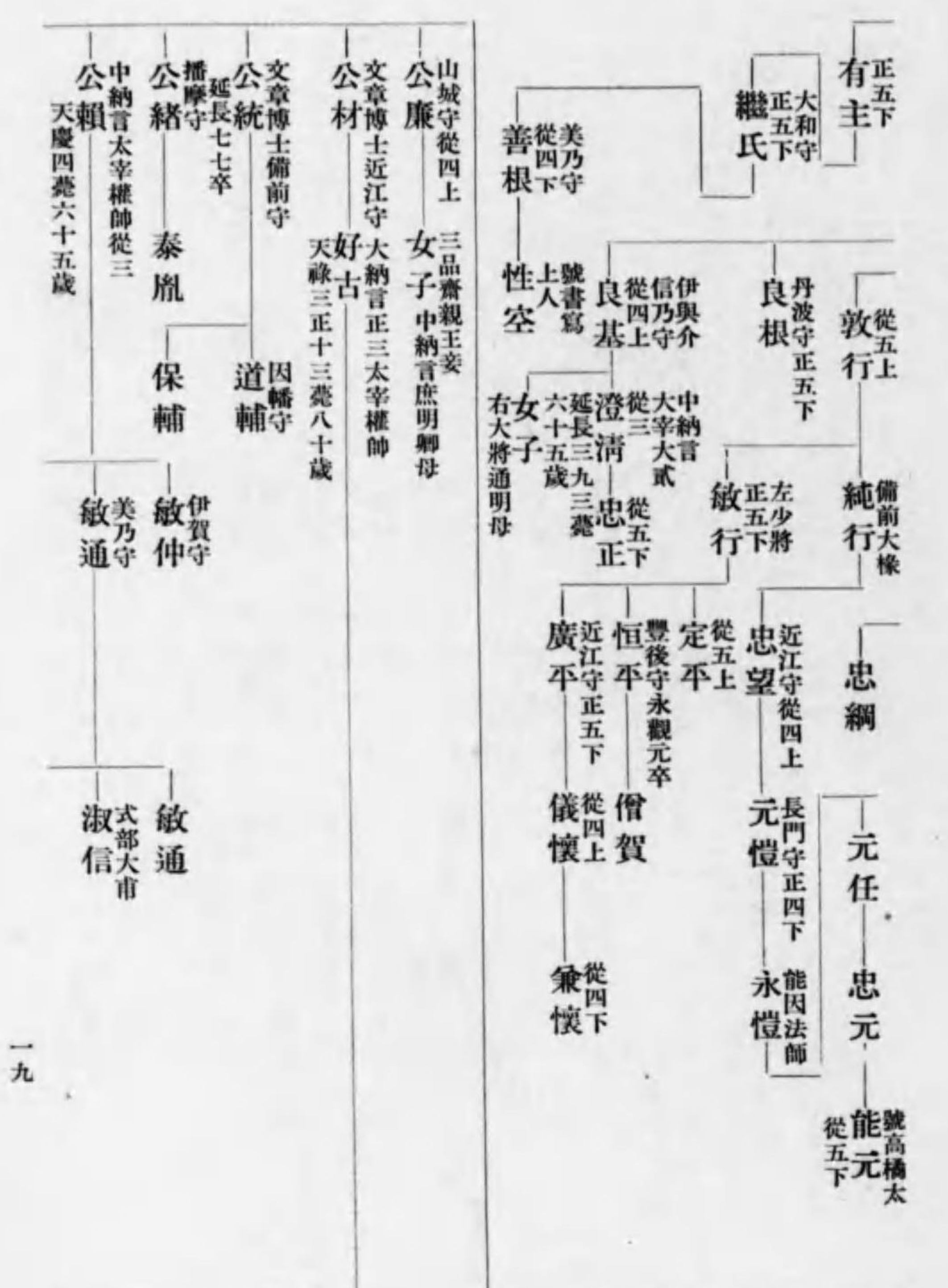
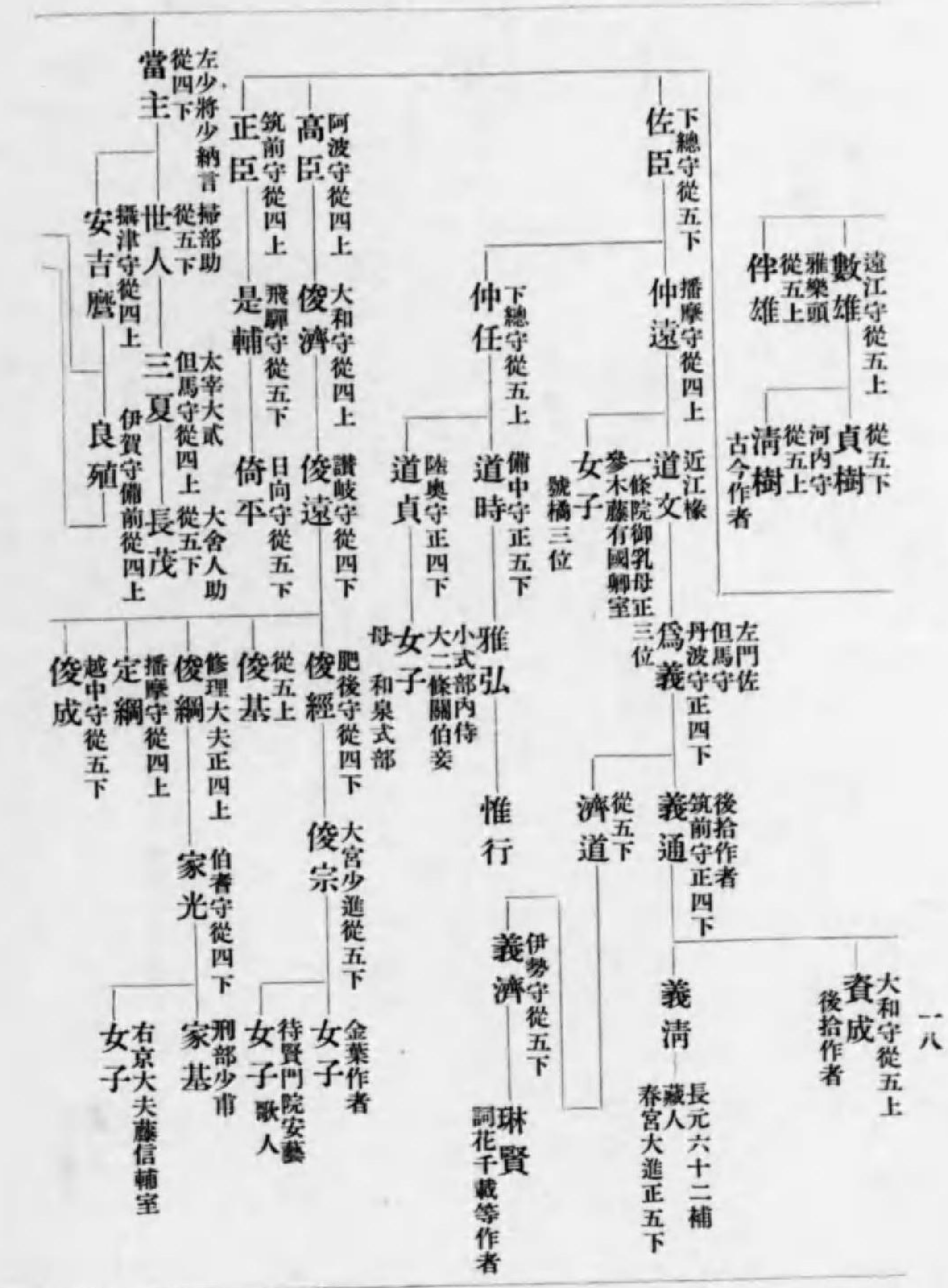
寬平二五十六卒五十四歲
贈中納言從三

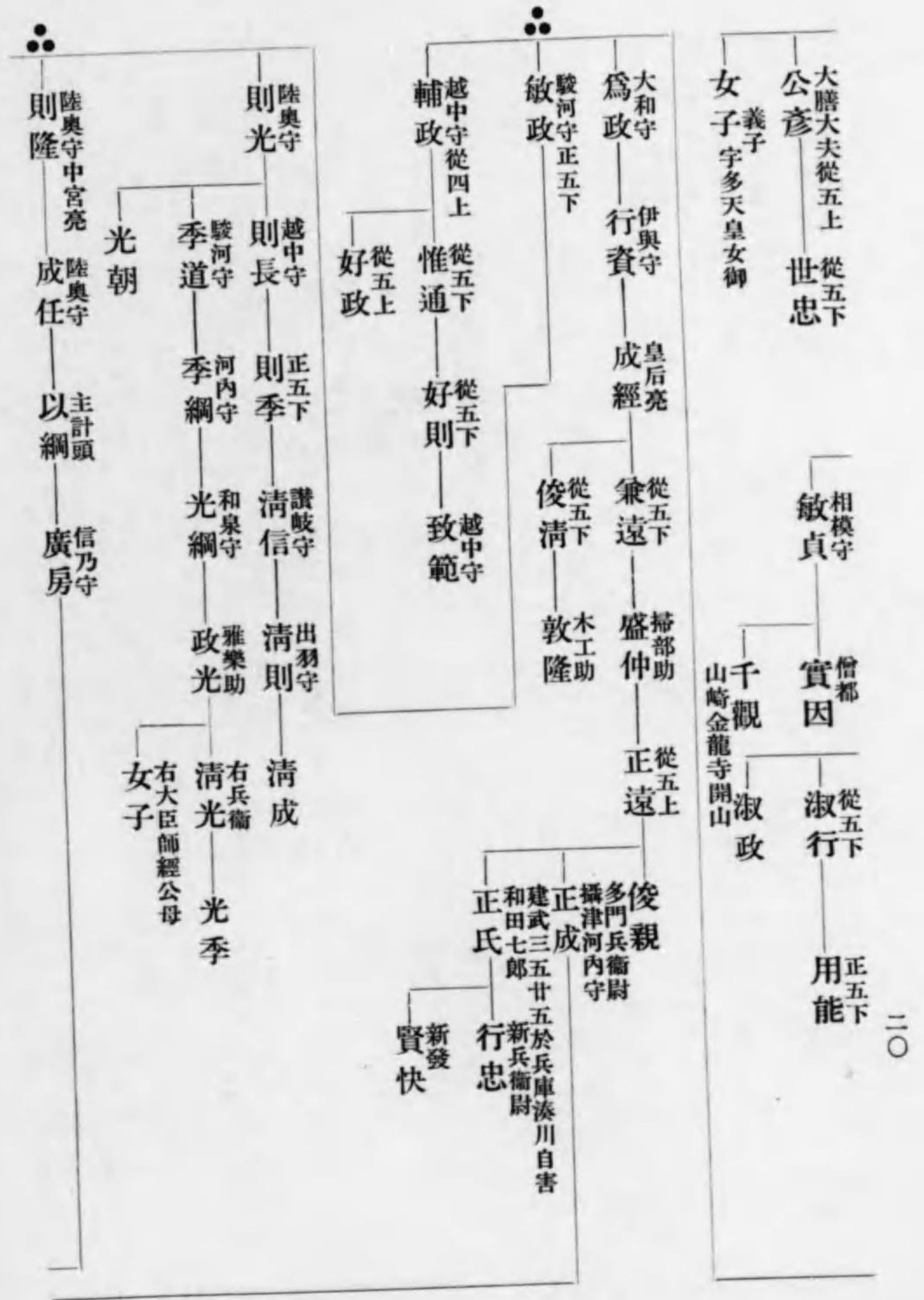
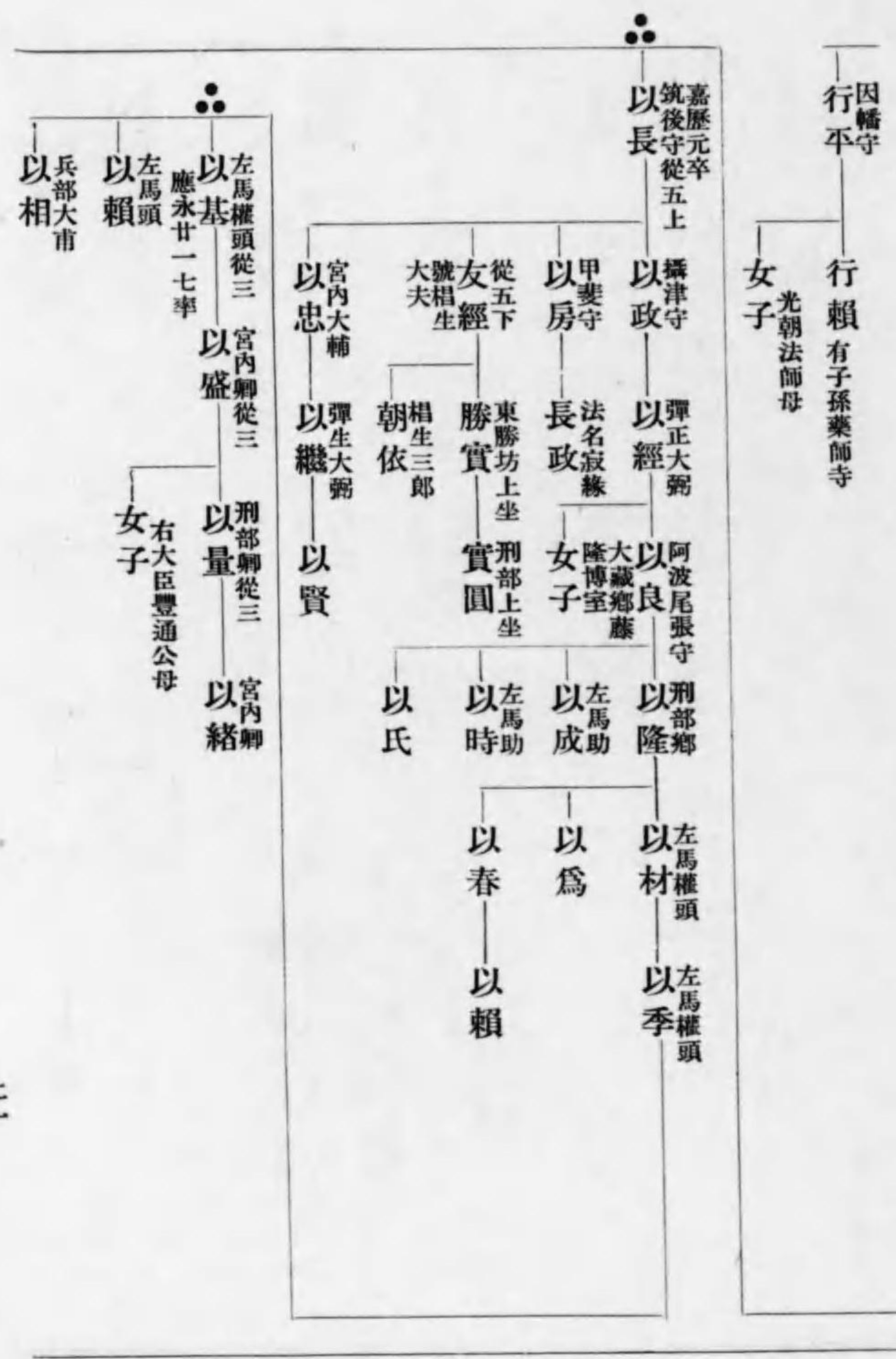
陸守守正四下
大皇太后宮亮
爲仲

右近中將從四上
長谷雄

越前佛前守
左中辨正四下
海雄

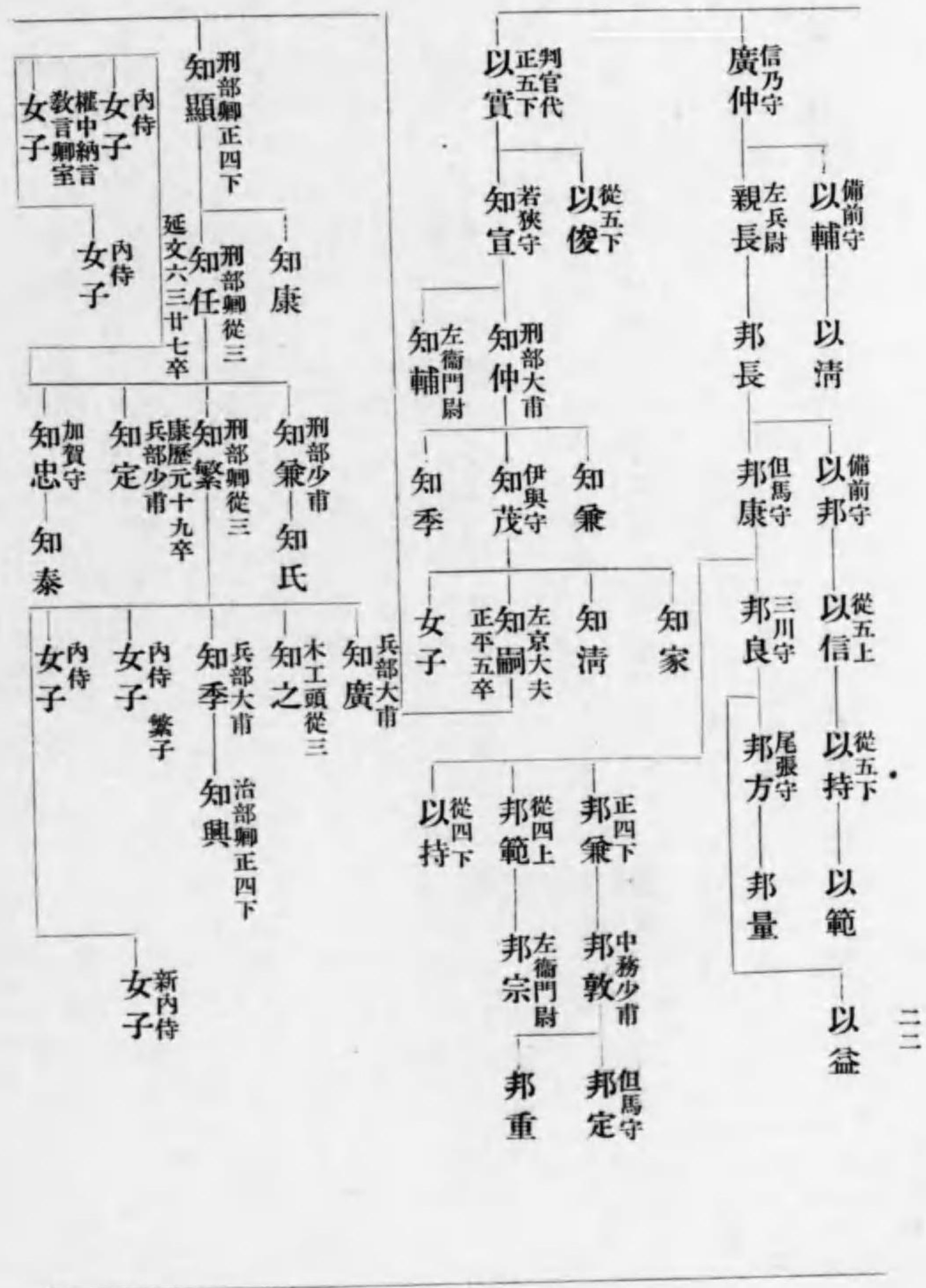
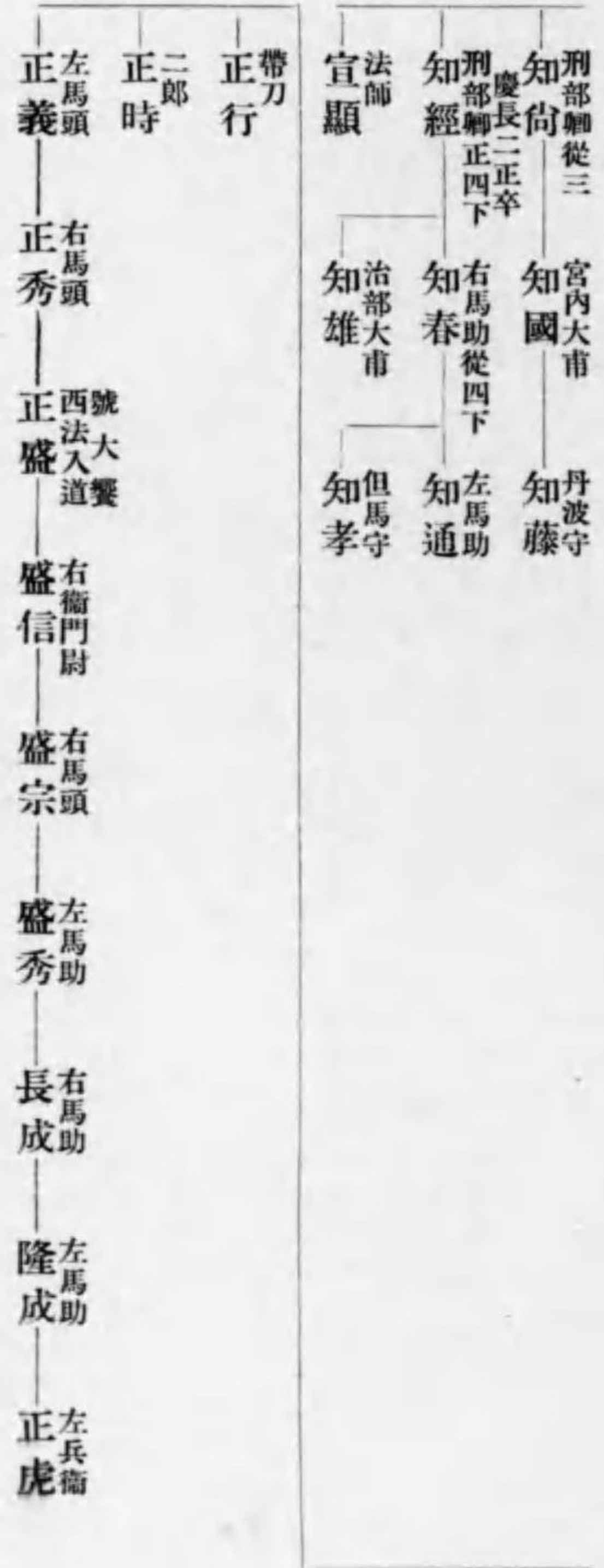
築前守從四下
茂枝





橋姓の後裔と稱する氏名（寛政家譜、續羣書類從、系圖綜覽）

橋、楠、中井、長尾、岩屋、田中、淺井、山中、
 岡本、米野、藥師寺、江坂、小野、三木、稻野、本山、石黒、守山、袖岡、
 平井、竹内、高橋、山崎、數原、栗崎、杉浦、早瀬、土田、山脇、
 郡 齊田、猪狩、岩下、梶川、佐合、尾崎、若林、辻、巨勢、上田、水野、



甲斐庄、會田、井關、長谷川、紅林、曲直瀬、山田、野尻、福富、松井、
黑田、大平、牧

二四

昭和十年八月二十五日發行

(非賣品)

[製複許不]

發 行 者 兼	岡 本 敏 行	東 京 市 中 野 區 仲 町 一 番 地
印 刷 者	稻 垣 武 雄	東 京 市 牛 込 區 市 谷 加 賀 町 一 ノ 三
印 刷 所	大 日 本 印 刷 株 式 會 社	東 京 市 牛 込 區 市 谷 加 賀 町 一 ノ 三

368
96

終

